

上の林遺跡

(第3次)

長野県上伊那郡箕輪町
緊急発掘調査報告書

昭和57年

箕輪町教育委員会

上の林遺跡第3次調査

昭和57年

箕輪町教育委員会

序

箕輪町教育委員会

教育長 樋口彦雄

箕輪町には他に劣らぬ多くの埋蔵文化財と遺跡があるが、この上の林遺跡もその一つである。箕輪工業高等学校は昭和23年新学制により中箕輪高等学校として地域の熱意により発足し、此の地に木造校舎を建築した。後県立高校となり、また工業高校となった。

高校建築整備事業により、昭和55年を第一期として箕輪工業高校の改築が順次進められるため、同地籍にある埋蔵文化財の緊急発掘調査を実施することが必要となった。

県立高校の敷地内の発掘であるが、地籍が箕輪町であるため事業の総てが、当町教育委員会に委託された。町としてはこれを積極的に受けとめ、県教育委員会文化課へも綿密な指導、助言を仰ぎ事業を推進した。調査団長には第1・2・3次調査とも丸山敞一郎氏を依頼し、また第2次調査には、発掘調査に豊富な経験をもつ調査員を紹介していただいた。それを生かして第3次調査には町内の発掘にいつも参加される大学・高校生・地元の作業員によってより充実した調査体制をつくることができた。

調査結果の細部については章を追って明らかにするが、主なものとして第3次では遺構があげられる。その特徴は大型建造物址の検出で、これは初めてのことである。

高校敷地の全域が遺跡であるため、第1・2・3次の調査のできたことを有難く思うが、今後更に校舎改築が進められるならば、今までと同様に調査依頼は引き続き、受けたい考えであるので、地下に眠る貴重な文化遺産を保護するために配慮をお願いしたい。

酷暑の中で厳しい作業を続けていただいた調査参加の皆さん、また本報告書作成にあたられた関係各位に厚く御礼を申し上げます。

例 言

- 1、本書は、長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13、238番地に所在する上の林遺跡第3次調査の報告書である。
- 2、本調査は、箕輪工業高等学校の委託を受けて箕輪町教育委員会が実施した。
発掘調査は昭和57年8月6日～8月25日まで実施し、引き続き整理作業を行なった。
作業分担は次の通りである。
土器の復原—福沢幸一、遺構実測図の整理—五味純一、山内志賀子、竹入洋子、柴登巳夫
土器の実測、トレース—竹入洋子、五味純一、石器の実測、トレース、一覧表—
竹入洋子、中村哲二、五味純一、柴登巳夫、土製品の実測、トレース—竹入洋子
土器の拓本、測面実測、トレース—山内志賀子、写真図版の作成—山内志賀子
柴登巳夫
- 3、本書に掲載した遺構の写真は柴登巳夫が撮影したものを使用した。尚、出土遺物の撮影は征矢進氏に御協力いただいた。
- 4、石器の石質鑑定は樋口彦雄氏（箕輪町教育長）にご教示いただいた。
- 5、本書の執筆は丸山敞一郎、柴登巳夫、五味純一が行った。
- 6、本書の編集は発掘調査団が行なった。
- 7、本書の資料は、箕輪町郷土博物館に保管されている。

凡 例

1、各遺構の略号は次の通りである。

縄文時代の住居址—J 弥生時代の住居址—Y 平安時代の住居址—H
土壇—D

2、住居址実測図は ㊦ あるいは ㊧ とし小形の土壇、炉址等は ㊨ のものもあり、各々の実測図面に明記してある。

3、土器の実測図 ㊩ 、拓影 ㊪ に縮尺してある。大きさによって必ずしもこの限りでないが、各々の実測図に明記してある。

4、石器実測図は ㊫ 及び ㊬ とした。

本 文 目 次

題 字	教育長	樋口彦雄
序	”	”
例 言		
凡 例		
本文目次		
付表目次		
挿図目次		
図版目次		
第 I 章	遺跡の立地	1
第 1 節	位 置	1
第 2 節	上の林遺跡付近の自然環境	2
第 3 節	歴史的環境	3
第 II 章	発掘調査の経過	5
第 III 章	発掘調査の結果	12
第 1 節	調査結果の概要	12
第 2 節	遺構と遺物	13
1	住 居 址	13
1)	J 1 号住居址	13
2)	Y 2 号住居址	19
3)	Y 3 号住居址	22
4)	J 4 号住居址	22
5)	H 5 号住居址	24
6)	J 6 号住居址	24
7)	H 7 号住居址	26
2	土 壇	27
1)	D 1 号土壇	27
2)	D 2 号土壇	29
3)	D 3 号土壇	30
4)	D 4 号土壇	31
3	炉 址	31
1)	石組炉址	31

4	掘立建造物址	34
1)	掘立建造物址	34
2)	ピット群	35
5	グリッド出土土器	36
6	土製品	39
7	石器	45
第IV章	ま と め	50

付 表 目 次

第 1 表	出土石器一覧表—1	47
第 2 表	〃 —2	48・49

挿 図 目 次

第1図	位 置 図	1
第2図	遺跡周辺地形図	2
第3図	周辺遺跡分布図	3
第4図	周辺地形図及び発掘区域図	4
第5図	遺構全測図	12
第6図	J 1号住居址実測図	14
第7図	J 1号住居址出土土器実測図	15
第8図	J 1号住居址出土土器拓影—No.1	16
第9図	J 1号住居址出土土器拓影—No.2	17
第10図	Y 2号住居址実測図	18
第11図	Y 2号住居址出土土器及び木炭分布図	19
第12図	Y 2号住居址出土土器実測図	20
第13図	Y 2号住居址出土土器拓影	21
第14図	Y 3号住居址実測図	22
第15図	Y 3号住居址出土土器拓影	22
第16図	J 4号住居址実測図	23
第17図	J 4号住居址出土土器拓影	23

第18図	H 5号住居址実測図	24
第19図	J 6号住居址実測図	25
第20図	J 6号住居址出土土器実測及び拓影	26
第21図	H 7号住居址実測図	26
第22図	H 7号住居址出土土器実測図	27
第23図	D 1号土壇実測図	28
第24図	D 1号土壇出土土器拓影	28
第25図	D 2号土壇実測図	29
第26図	D 2号土壇出土土器拓影	29
第27図	D 3号土壇実測図	30
第28図	D 3号土壇出土土器実測図	30
第29図	D 4号土壇実測図	31
第30図	D 4号土壇出土土器拓影	31
第31図	石組炉址実測図	32
第32図	石組炉址内出土土器実測図	32
第33図	掘立建造物址実測図	33
第34図	掘立建造物柱穴址地層断面図	35
第35図	ピット群実測図	35
第36図	グリッド出土土器実測図	36
第37図	グリッド出土土器拓影 No. 1	37
第38図	グリッド出土土器拓影 No. 2	38
第39図	出土土製品実測図	39
第40図	出土石器実測図 No. 1	40
第41図	出土石器実測図 No. 2	41
第42図	出土石器実測図 No. 3	42
第43図	出土石器実測図 No. 4	43
第44図	出土石器実測図 No. 5	44
第45図	出土石器実測図 No. 6	45

図 版 目 次

- 図版 1 発掘調査区近景
- 図版 2 遺構全景、J 1 号住居址
- 図版 3 Y 2 号住居址 Y 3 号住居址
- 図版 4 J 4 号住居址、J 6 号住居址
- 図版 5 掘立建造物址、D 1 号土壇
- 図版 6 D 2 号土壇、D 4 号土壇
- 図版 7 H 5 号址カマド、H 6 号址カマド
- 図版 8 石組み炉址、J 1 号址炉
- 図版 9 土壇土層状況
- 図版10 土層状況
- 図版11 遺物出土状況
- 図版12 遺物出土状況
- 図版13 調査スナップ
- 図版14 視察風景
- 図版15 出土土器
- 図版16 出土土器、出土土製品
- 図版17 J 1 号住居址出土土器片
- 図版18 出土土器片
- 図版19 出土土器片
- 図版20 出土土器片
- 図版21 出土石器
- 図版22 出土石器
- 図版23 出土石器

第1章 遺跡の立地

第1節 位置 (第1図)

上の林遺跡は長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13,238番地に所在し、そのほとんどが、県立箕輪工業高等学校の敷地となっている。遺跡は第三段丘の突端に位置し、左右に続く段丘上はほとんど遺跡の密集地帯となっている。段丘下からは豊富な湧水が随所に見られ、住居を設定するには最も適した自然環境の地と思われる。眼下に見る国道から400mほど離れ、天竜川との比高 40 mを計る。



第1図 位置図

第2節 上の林遺跡付近の自然環境

箕輪町は、東の三つ峰（1,400m）から、西の黒沢山（2,100m）、北は漆戸部落（720m）から、南は木ノ下部落（700m）の広がりを持つ地域である。

このほぼ中央を天竜川が北より南に流れて伊那谷を形成する。この天竜川より東の山地は赤石山系に、西は木曾山系に属するが、この西の裾から広がる扇状地の末端の河岸段丘の上に、上の林遺跡がある。また西の山系は変成岩を主とし、チャートの露頭もあり、粘板岩、礫岩も見られ、天竜川に至る間は、天竜礫層を経て沖積層となっている。この天竜礫層をおおっているのが、御岳ロームである。ロームについて、西の山麓にある箕輪西小学校の全面改築の際のボーリング検査の結果約25m、学校と上の林遺跡との中間、中原部落の箕輪町二水道削井工事の報告によれば約70mほどの地下に砂礫混入のロームを確認している。

上の林遺跡のある扇状地の末端の段丘崖には常に湧水が多く、現在も湧き出ており、広く利用されている。扇状地に田切地形をつくっているのは、近くの帯無川である。天竜川に流入するわけであるが、川の名称が尾水無川から転じたと言われる位に伏流水となっている。

西山麓への扇状地は、現在川岸より取水し伊那市に至る26kmの用水路(西天竜)を開発し上伊那の穀倉となっているが、開田前は平地林が山麓まで続いていた。

段丘崖、ローム層、原野はここに先史、原始時代の住居跡の多いことの要件と考える。

(樋口 彦雄)



第2図 遺跡周辺地形図

第3節 歴史的環境

箕輪町は天竜川をはさんで典型的な河岸段丘と、数多い扇状地とが独得の地形を作りだし、絶好の居住性をもつ一帯は遺跡分布の密な地域である。先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その総数200ヶ所に及び伊那谷においても屈指の遺跡地帯である。町内の遺跡を立地する条件により分類すると、次の四つに分けられる。

第1群 経ヶ岳山塊の山麓付近に立地する遺跡。

第2群 天竜川西岸の段丘上に列上に並ぶ遺跡。

第3群 天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡。

第4群 低位段丘（沖積段丘）の遺跡。

上の林遺跡は第2群に属する遺跡の一つである。まずこの段丘上の遺跡群について考察すると南側には洞一つ隔てて位置するのが北城遺跡である。第2群中において最大の規模を持っていると思われる。昭和46年長野県企業局の分譲住宅地造成事業に伴い緊急発掘調査を実施し、縄文中期から中世に至る大複合遺跡であることが判明した。この調査において弥生時代後半の大集落の一部とみられる23戸の堅穴住居址と20余基の中世火葬墓群が検出され注目される遺跡である。その南には南城遺跡、猿楽遺跡と続き、それぞれ発掘調査が実施されている。

町境になっている油ヶ沢を越えて南箕輪村の遺跡群に目を移すと、やはり段丘上には多数の遺跡が存在している。沢を越えると、南垣外、丸山、天王森、上人塚、垣外と並び、天伯遺跡は昭和42年の土地改良事業に伴う緊急発掘調査によって、縄文中期から平安時代に至るまでの大複合遺跡であることが確認されている。又その南には昭和33年の発掘調査によって、ローム層内から発見された槍先型尖頭器をはじめとする多数の石器類が出土した神子柴遺跡がある。

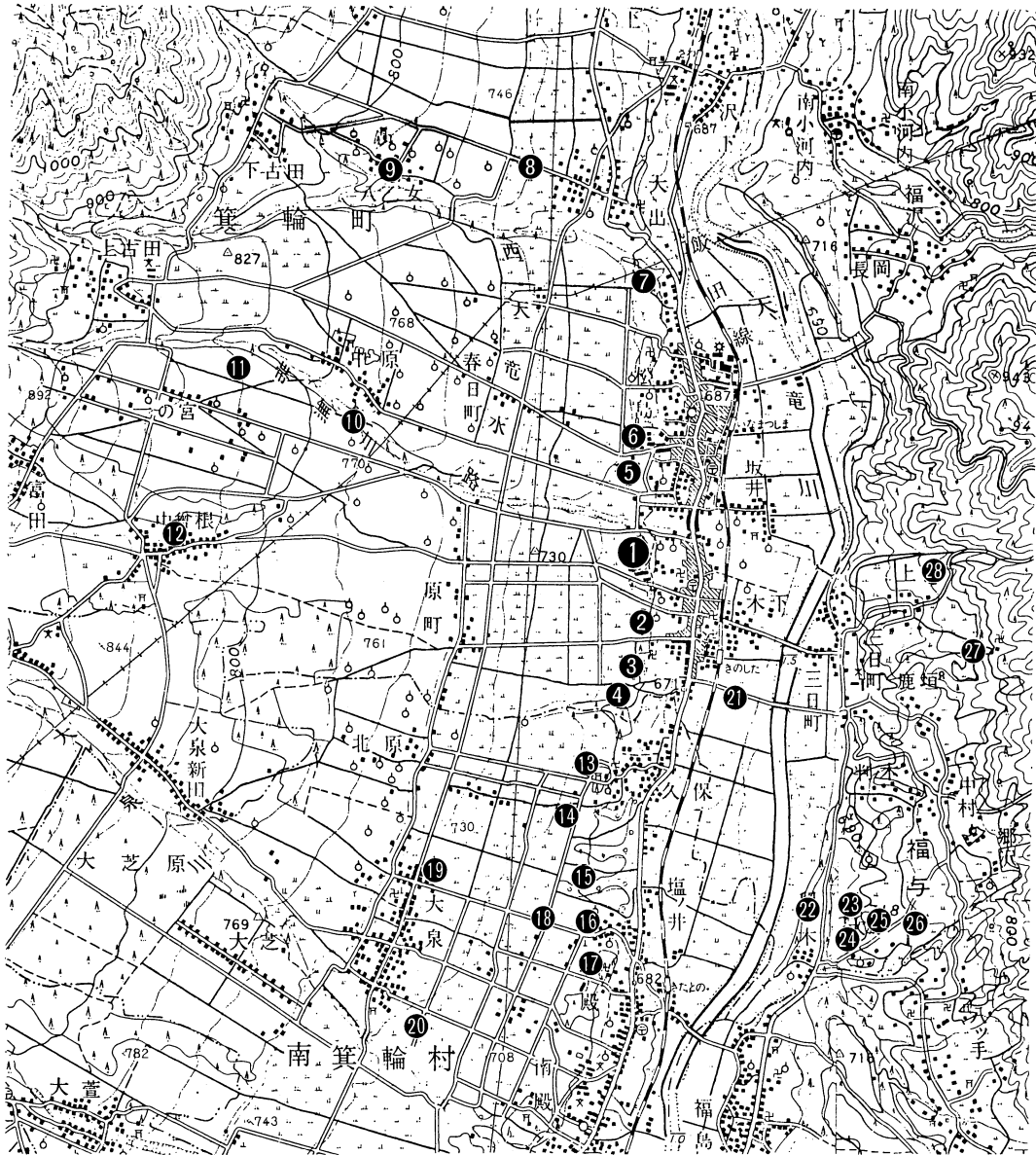
次に上の林の北側には、藤山、中山、本城と続き、深沢川南の段丘上突端には上伊那郡唯一の前方後円墳「松島王墓」がある。前方部が後円部よりやや高く、中央のくびれ部の左右に造り出しが付けられ、この点県下で唯一の車塚形式の古墳である。

次に第4群の低位段丘の遺跡に目をやると、天竜川氾濫原上に在る代表遺跡として「箕輪遺跡」を上げなければならない。箕輪遺跡は飯田線木下駅東方から、南箕輪村塩ノ井地籍までの広範囲に及ぶ大遺跡である。昭和27年から施行された土地改良事業によって、当該地籍から縄文時代中期より近世に至る多量の遺物が出土した。なかでも注目されたのは、田舟、田下駄、木製人形、木製農耕具、木器類、更には延長4,000メートル余、数量数万本に達するといわれた木柵等である。昭和55年度から一部に発掘のメスが入れられている。

古墳時代に松島王墓古墳が築かれたり、中世末（天正10年）には箕輪遺跡の中央に位置する水田の中に「田中城」が築かれたのも、一帯から生産される米が大きな力となっていたであろう。弥生時代から近世に至るまで、段丘上の集落と段丘下沖積面の水田とのかかわりは、米生産を

背景とし、政治、経済の中心地として続いたのである。

(柴 登巳夫)



- ①上の林 ②北城 ③南城 ④猿楽 ⑤藤山 ⑥中山 ⑦王墓古墳
- ⑧中道 ⑨五輪 ⑩並木下 ⑪一の宮 ⑫中曾根北 ⑬向垣外 ⑭山の神
- ⑮天伯 ⑯上人塚 ⑰垣外 ⑱内城 ⑲大泉 ⑳宮の上 ㉑箕輪遺跡群
- ㉒北垣外 ㉓黒津原 ㉔矢田 ㉕上金 ㉖大原 ㉗澄心寺下 ㉘御射山

第3図 周辺遺跡分布図

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

上の林遺跡は町内に存在する遺跡中においてもすぐれたものの一つとして位置付けられている。天竜川西に続く河岸段丘上にベルト状に並ぶ遺跡は縄文時代より平安時代まで複合するものが多い。本遺跡も昭和55・56年に第I次、II次の発掘調査によりその一部が解明されている。

本年度は校舎改築が第3期目に入り、発掘調査もそれと平行して計画されることとなった。昭和57年度に入り長野県教育委員会より箕輪町教育委員会に発掘調査の指示があり、県文化課の指導のもとに調査計画内容を検討し、校舎の改築工事前に発掘調査を実施するものとし、諸届を済ませる。

調査は第I、II次に続き、丸山敞一郎氏を調査団長とする調査団を組織し記録保存を目的とした上の林遺跡第III次緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。

第2節 調査の概要

- ・遺跡名 上の林遺跡
- ・所在地 長野県上伊那郡箕輪町大字中箕輪13238番地
- ・発掘期間 昭和57年8月6日～8月25日
- ・調査委託者 箕輪工業高等学校長 川上 輝
- ・調査受託者 箕輪町教育委員会
- ・調査会・調査団の構成は下記の通りである。

調査会

会 長	市川脩三	町誌編纂専門委員
理 事	荻原貞利	教育委員会社会教育指導員
〃	竹花久木	〃
〃	大槻 剛	町誌編纂委員
監 事	小林重男	郷土博物館専門調査員
〃	堀口貞幸	町誌編纂委員

調査団

団 長 丸山徹一郎 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校教諭 日本考古学協会員
担当者 柴登巳夫 箕輪町郷土博物館学芸員
主 任 福沢 幸一 長野県考古学会員
調査員 久保寿一郎 奈良大学学生

作業協力者

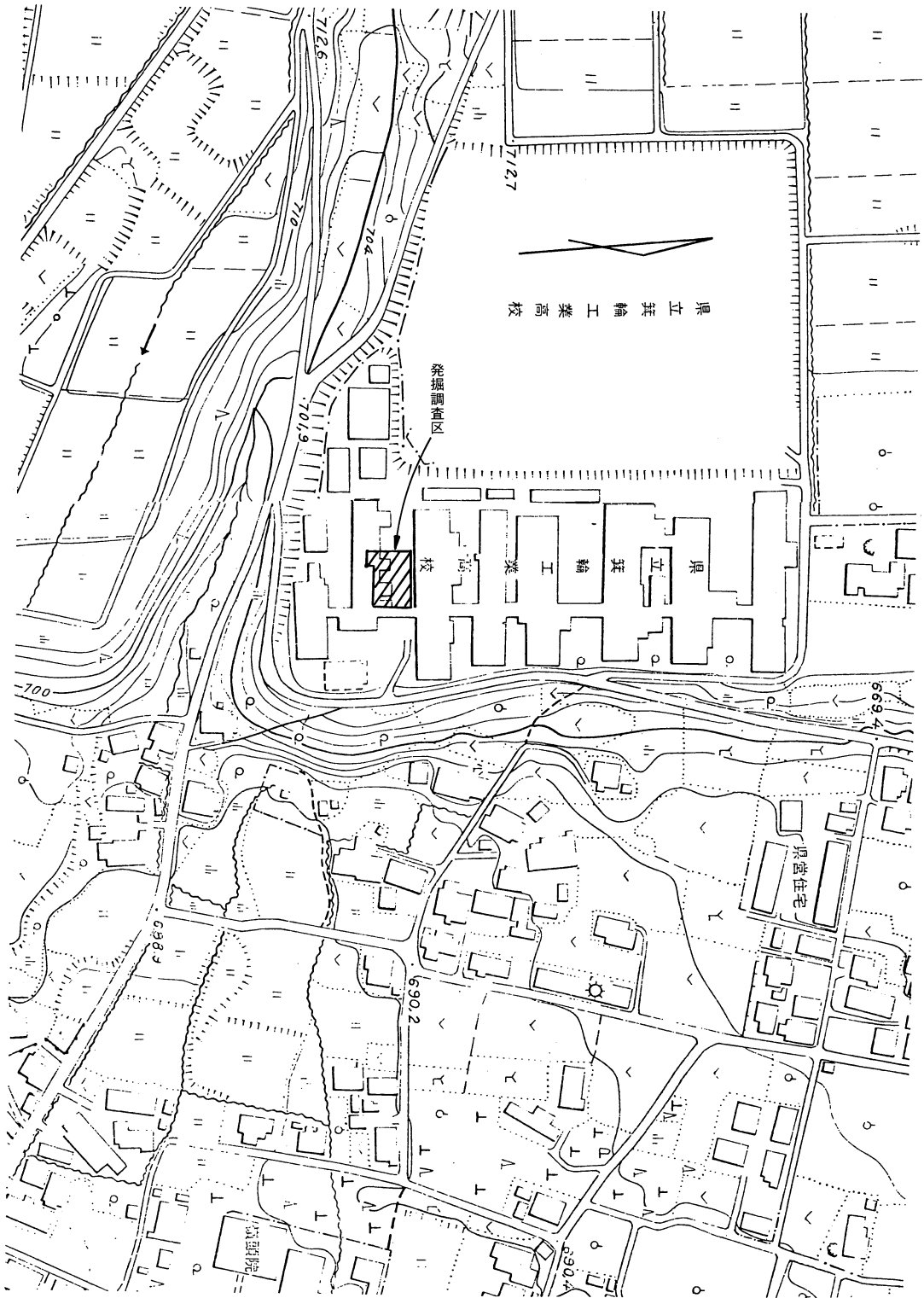
山内志賀子 五味純一 泉沢利夫 唐沢清人 清水今朝雄 唐沢忠賢 神子柴喜義
小池保則 中村哲二 唐沢剛俊 北沢武志 金子美智恵 茶城陽一 岡稻雄
小林昌幸 原由美子 山口勝博 瀧井誠弥 吉沢早苗 小林紀史 唐沢浩志
白鳥明美 飯島俊明 野沢誠一 小田切文雄 堀内徹 東條明彦 馬場保之
三宅昭夫 小坂考紀 小林淳子 竹入瑞枝 井内裕司 (順不同)

参 与

馬場吟一 教育委員会教育委員長
原 茂人 " " 職務代理
戸田宗十 教育委員会教育委員
桑沢良平 " "
荻原貞利 文化財保護審議会委員長
藤田寛人 " 副委員長
市川脩三 " 委 員
矢沢喬治 " "
堀口貞幸 " "
小林正之進 " "
唐沢忠孝 " "
小林健男 " "
山崎義芳 " "
上田晴生 " "

- 調査に関する事務局の構成組織は下記の通りである。

樋口彦雄	教育委員会教育長
坪井栄寿	〃 社会教育課長
太田文陳	〃 社会教育係長
柴登巳夫	郷土博物館学芸員
竹入洋子	〃 〃



第4図 周辺地形図及び発掘区域図

第 節 発掘調査日誌

○ 8月6日 (金) くもり、晴

調査用資材を現地へ搬入、テント設営、ブルドーザーにより表土を20～30cm程度排土作業開始。調査区全域が校舎の基礎や植木などで、かなり深くまで荒れていると予想される。

○ 8月7日 (土) 晴

昨日に続き排土作業を続ける。東側が少し低くなっており遺構も深いと思われる。ブルドーザー排土中にも縄文土器片が多数出土している。

○ 8月9日 (月) 晴

排土の残りを実施。グリット設定。午後団長、教育長さん出席で結団式を行なう。ブルドーザーによる排土だけで何ヶ所かの落込みが確認される。

○ 8月10日 (火) 晴

全作業員を4班に分け、調査区も4分し各1区を受け持つようにする。東北の角からグリット番号を付ける。校舎の基礎コンクリートが残っておりその部分の調査は不可能と考える。

8月11日 (水) 晴

D-5からG-5グリットにかけ東西に一列に並ぶ柱穴状のピット検出。C-7グリットを中心に方形落込み確認、縄文式土器片と共に打製石斧も出土している。

○ 8月12日 (木) くもり

午前中にE-10、11とF-10、11グリット地区より円形プランを呈した住居址を確認したため、プランを明確化するためその周辺を精査する。C-11、12グリットより土器片集

積地点を検出。D、E-12、13グリットで方形プラン確認。基本層序の把握が問題である。

○ 8月13日 (金) 晴

E、F、G-10、11で検出された住居址(J-1)のプラン確認。F-11グリットより釣手土器の把手部分出土。K、L-13、14、15グリットを中心に方形落込みが確認される。これを(Y-2)とする。

○ 8月14日 (土) 晴

Y-2住居址のプランが西側に張り出すと予想されるため、南、西側にグリットを拡張する。土層確認の為ベルトを設定、午後から覆土を取り始める。J-1住居址もプラン内の排土を続ける。土器集積部が検出され、写真撮影を行なう。プランは後世の攪乱で東南部が不明確である。この部分に杯蓋が出土していることでもわかるように後世の遺構と切り合っていることが確認される。

○ 8月17日 (火) くもり、雨

先に確認されたY-3、J-4、Y-5の各住居址を掘り下げる。Y-2住居址は覆土中に炭化物が多く、いつの時か火を受けた住居址ではないかと思われる。ほぼ方形プランで、基礎による掘り返し部分以外は確認される。J-1住居址の土器片集中部分はほぼ中央に位置し、床面から10～20cm上である。



○ 8月18日 (水) 晴、くもり

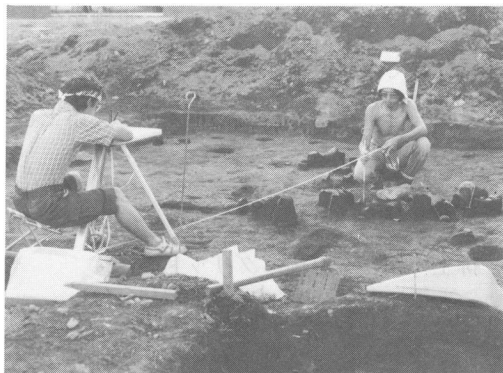
調査区北東に検出された柱穴列の確認、掘り上げ、実測を行なう。J-4住居址のプラン確認のため精査を行なう。住居址床面に多数の凹有り、出土土器片から見て、縄文時代前期末から中期初頭と思われるが、今日現在では確定せず。Y-2住居址は覆土中の炭化物や土器等を平板実測する。午後には一部床面上まで下げることができた。

○ 8月19日 (木) 晴

Y-2住居址は南北ベルトの地層断面図の実測、土器多数出土、紡錘車が完形で出土。H-5住居址プラン確認作業、カマド確認、弥生式土器の集中区を平板実測を行なう。J-6住居址の調査を始める。調査区西北角に検出された大型ピット列のほぼ全体が確認される。J-1号住居址東西ベルトのセクション実測、床面精査、および住居址各施設の検出作業を行なう。H-3住居址の東西ベルトセクションを実測。

○ 8月20日 (金) 晴

J-1住居址を最終的に床面、施設(炉、柱穴、周構)を精査し写真撮影、実測。H-3住居址の南北ベルトのセクション実測。ベルトの取りはずし、調査区内のベルトの取りはずし、土抔の調査を進める。Y-2住居址は床面上精査、遺物の取り上げ、大型柱穴列址の調査、ピットの半カット作業。全体的に遺構はほぼ確認が終了し、各遺構共に精査から写真撮影、実測に入る。今の状況から見て、残り一週間程度で終了できる予定である。



○ 8月21日 (土) くもり

Y-2住居址の埋竈炉の半カットと写真撮影、遺物の取り上げと平板実測。土器は8～9個体分はあるものと推定される。Y-3住居址を精査、写真撮影、実測を実施。柱穴は確認できず。J-1住居址平板実測、炉の部分精査、大型柱穴列址平板実測、H-5、H-7の各住居址も調査を進める。J-6住居址は南側を攪乱されておりプランが不明確である。土坑1～4もそれぞれ実測、写真撮影を行なう。

○ 8月23日 (月) 晴、雨

J-1住居址平面プラン実測完了。レベル実測はほぼ終了。精査により貯蔵穴その他が確認され、実測図に記入、清掃後写真撮影、Y-2住居址全体写真撮影、柱穴列址平板実測、J-4住居址ベルトセクション実測。Y-3住居址実測終了、H-5住居址の炉址を半カット後セクション実測。掘り下げを実施。

J-6住居址床面精査。

○ 8月24日 (火) 晴

J-1住居址レベル実測終了。本住居址の東側(D-11、12)より石組炉が検出されたため、精査、実測、写真撮影を進める。石組炉内より中期土器片が3分の1個体ほど検出される。柱穴列址のレベル実測を行なう。

J-6住居址の中央部に掘込み炉が検出され精査。H-7住居址は火を受けたものと考えられるが、焼土の量が多すぎるように思われる。カマドの半カットと掘り下げ、全体実測を実施。H-5住居址のカマド及び平面実測を行なう。調査区内の心要以外のベルトの取りはずし作業。

○ 8月25日 (水) 晴

石囲炉実測後、土器を掘り上げる。プラン、レベル実測、写真撮影、J-6住居址プラン、レベル実測、調査区内の全体清掃、校舎階上より全体写真撮影。

午後、テント及び資材片付、調査はすべて完了である。

○一週間後にブルドーザーで土のもどし作業を実施。

○現場作業進行中に出土した遺物の洗いを行なう。

○遺物洗いの終わったものから註記、遺物の整理を行なう。

○遺物復元、土器拓影作業の実施

○遺物実測、拓本測面実測、トレース

○遺構図面整理、トレース

○挿図作成

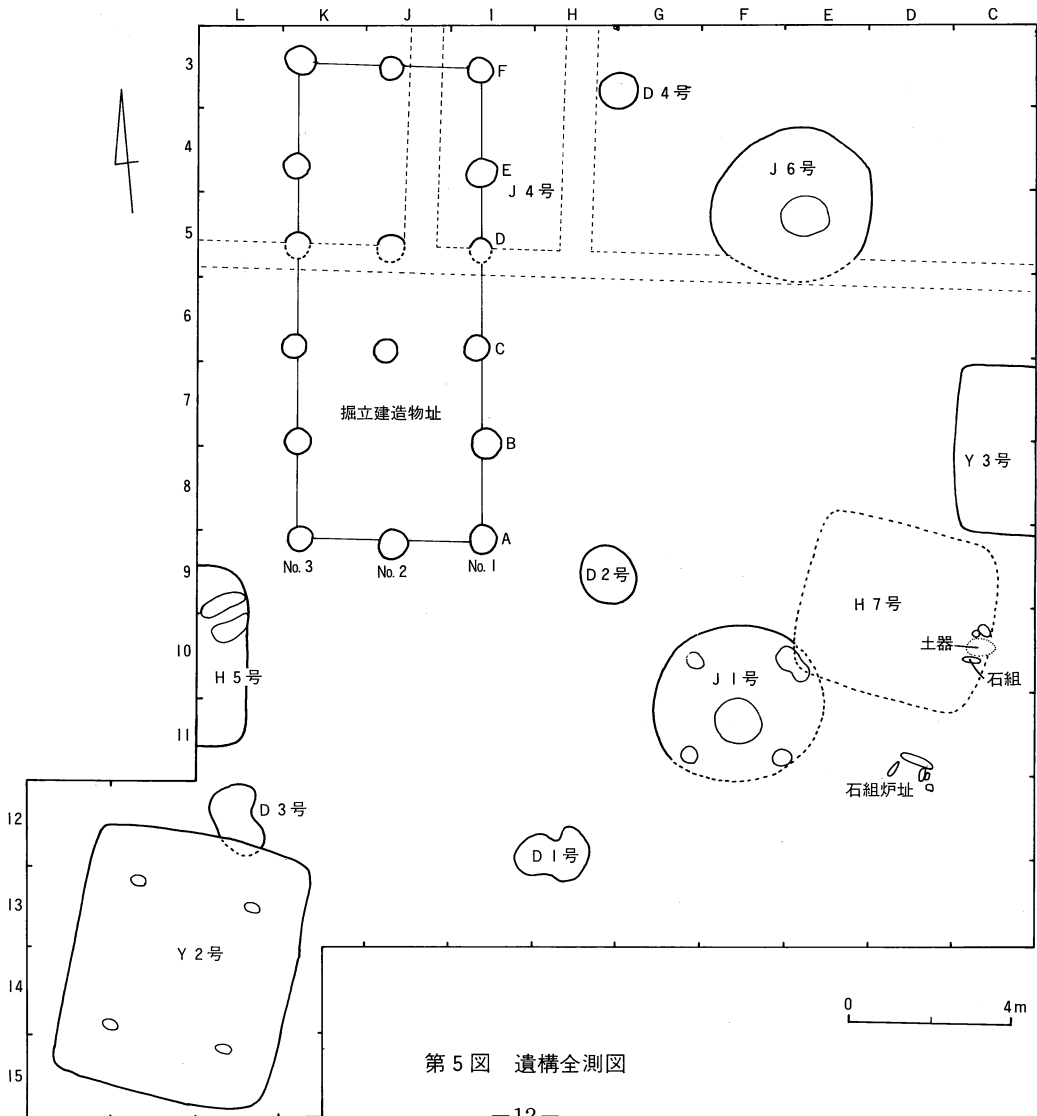
○原稿作成、編集

以上のような各作業を行ない報告書の作成となる。

第三章 発掘調査の結果

第1節 調査結果の概要

調査の結果は、第一・二次の調査とほぼ同じような内容であった。地続の段丘上であるため当然のことであるが、概要は次のようである。住居址7ヶ所、掘立建造物址1ヶ所、土坑4ヶ所、石組炉址1ヶ所、ピット群1ヶ所である。住居址には特に注目されるような内容はないが掘立建造物址はその規模、柱穴の配列状況において、当町ではきわめてめずらしいものであり初の検出であった。以下それぞれについて説明を記した。



第2節 遺構と遺物

1 住居址

1) J1号住居址

遺構 (第6図)

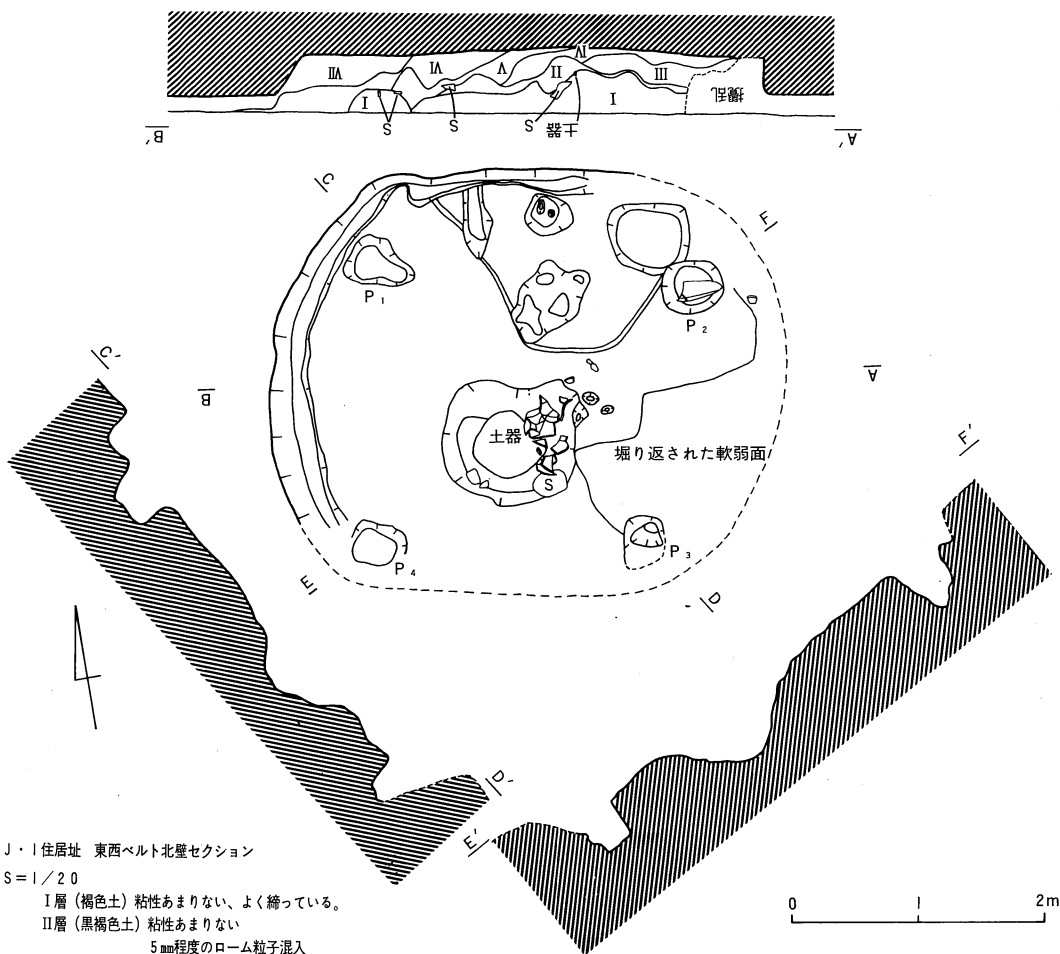
本住居址は、E、F、G-10、11グリッド内で検出された。表土を機械で削った後の整地作業時においてプランの一部を確認した。平面プランは東西に長い隋円形を呈し、長径440cm、短径340cmを測る。東南部がはっきりしなかったが、それは最近の攪乱によるものである。壁はかなり急な斜壁で、壁高は確認面より32~38cm内外である。支柱穴は4ヶ所に位置し、柱穴の形は一定していない。P1は54×38、-29cm、P2は50×44、-34cm、P3は40×32、-20cm、P4は44×38、-31cmを測る。住居址の覆土を掘り下げる過程において土器集中ヶ所が中央部にありそれは床面上10cmの所に位置した。床面は東南部がやや不規則な他はほぼ平らで堅い床になっている。住居址内施設として、竪穴炉、貯蔵穴、周溝等である。炉は住居址中央やや南寄りに長軸120cm、短軸90cmの掘り込みで、南寄りに炉石と思われる石が1個ある。炉の深さは48cmを測り中央底部が焼土化している。貯蔵穴はP2の横に位置し64×60、-38cmの隋円形を呈している。周溝は攪乱を受けている東壁及び南壁の一部を除いて他は確認されている。巾16cm前後で深さ5~12cm程度である。第一、二次の調査においてはこの時期の住居址はほとんど埋襲を持っていたが、本住居址には伴わなかった。本住居址は出土土器からみて曾利II式平行期である。

遺物 (第7図1~3)

本住居址出土の土器で実測できたのは第7図に示す3個体であった。1は器高25cm余の深鉢で、茶褐色の色調を呈し、焼成は中位である。文様構成は頸部から胴下部に及び、渦巻隆帯文が胴部から底部にかけ4ヶ所垂下している。これにより文様は4区画に分かれ、区画内部は綾杉文状のへら描き沈線で埋められている。口縁部は無文帯でその下を交互刺突連続文が一周している。頸部は波状沈線と平行沈線が施されている。頸部やや下にも交互刺突連続文がある。これが文様としては強い印象を与えている。

2は器高9cm余の湯呑茶碗状の小さなもので、口縁直下に細い沈線が1本周っている。その下からL字状の隆帯が5本底部近くまで垂下している。これにより5区画され、区画内は綾杉状へら描き沈線によって埋められている。胎土中に多量に雲母を含み、茶褐色を呈し、焼成良好な土器である。

3は器高32cm、口縁部径31cmを測る中型の深鉢である。胎土中に雲母と砂粒を多く含み、焼成は良好で暗褐色の色調を呈する。口縁部は無文帯で頸部から胴部にかけ2本の平行隆帯間を



J・1住居址 東西ベルト北壁セクション

S=1/20

- I層 (褐色土) 粘性あまりない、よく締っている。
- II層 (黒褐色土) 粘性あまりない
5mm程度のローム粒子混入
- III層 (褐色土) 粘性なし、土器片、炭化物混入
- IV層 (黄褐色土) 2mm程度のローム粒子混入
- V層 (黒褐色土) 土質はII層同様だがローム粒子を含まない
- VI層 (褐色土) 粘性なし、1cmぐらいの砂岩、5mm程の炭化物
5cmぐらいのローム含む
- VII層 (黄褐色土) 粘性なし、5mm程度のローム粒子多量混入

J・1住居址 炉南北ベルト西壁セクション

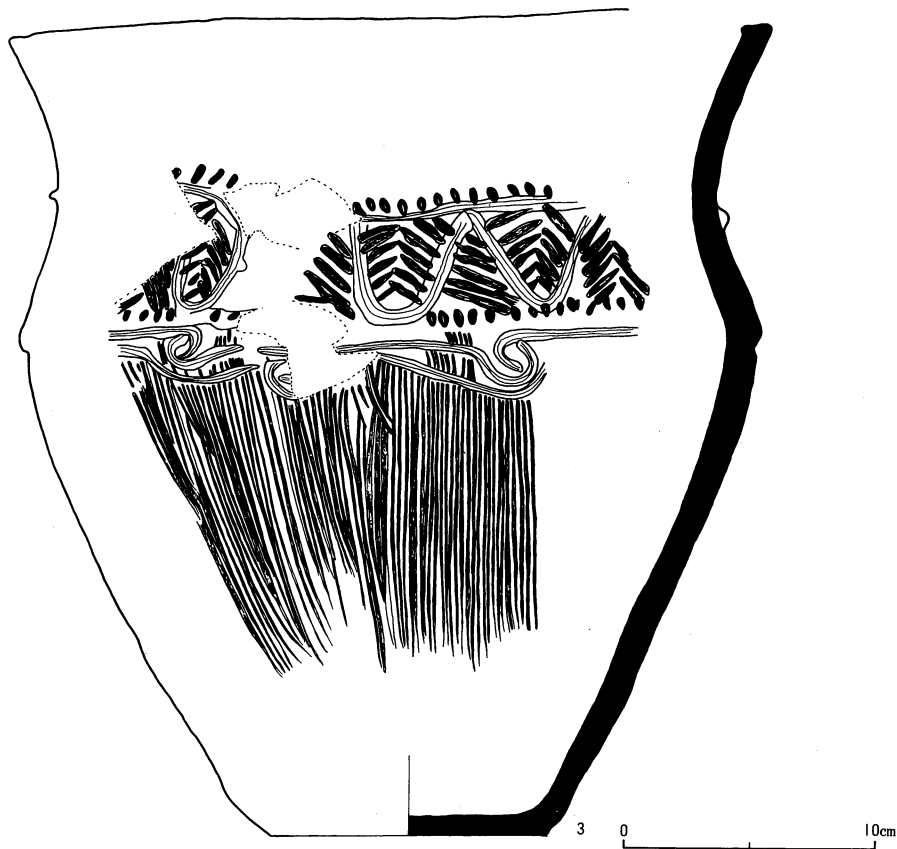
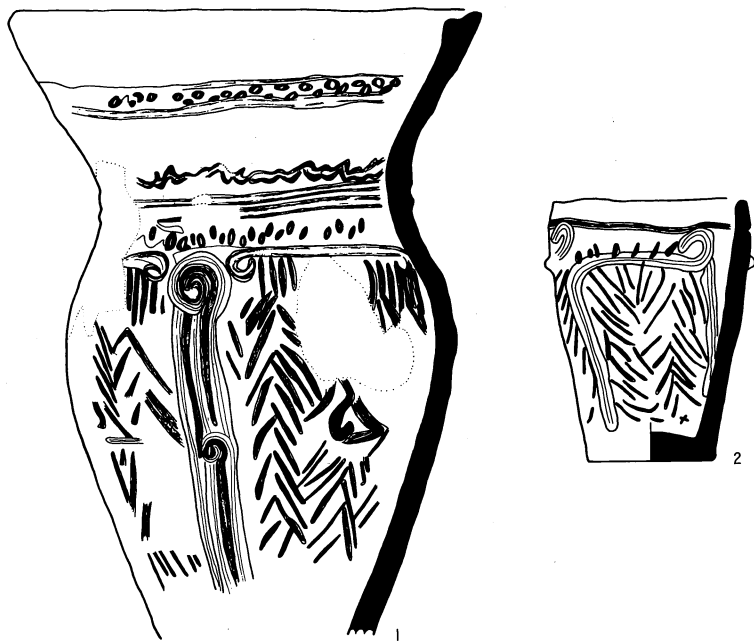
S=1/20

- I層 (暗褐色土)
- II層 (暗赤褐色土)

第6図 J・1号住居址実測図

大きな連続山形文で三角形に区画している。その中を綾杉状の沈線文で埋めている。胴部は沈線による入り組み文が施され、胴下部は楯状工具で平行沈線が縦に全面に施されている。

拓影は実測図8、9に示してある。8図には口縁部をもつ土器を主体とした。これ等の口縁はやや内湾し内側の口唇部に蓋受状の突起が貼付け調整されているものが見られる。器形は樽形状の大形甕と頸部がややくびれる中形の深鉢が主体である。文様構成は渦巻隆線文、渦巻沈線文、貼付け隆帯による区画文であり、区画されている内側は綾杉状の沈線文や楯状工具による平行沈線文などで埋められている。時期的には曾利II式に平行するものとする。



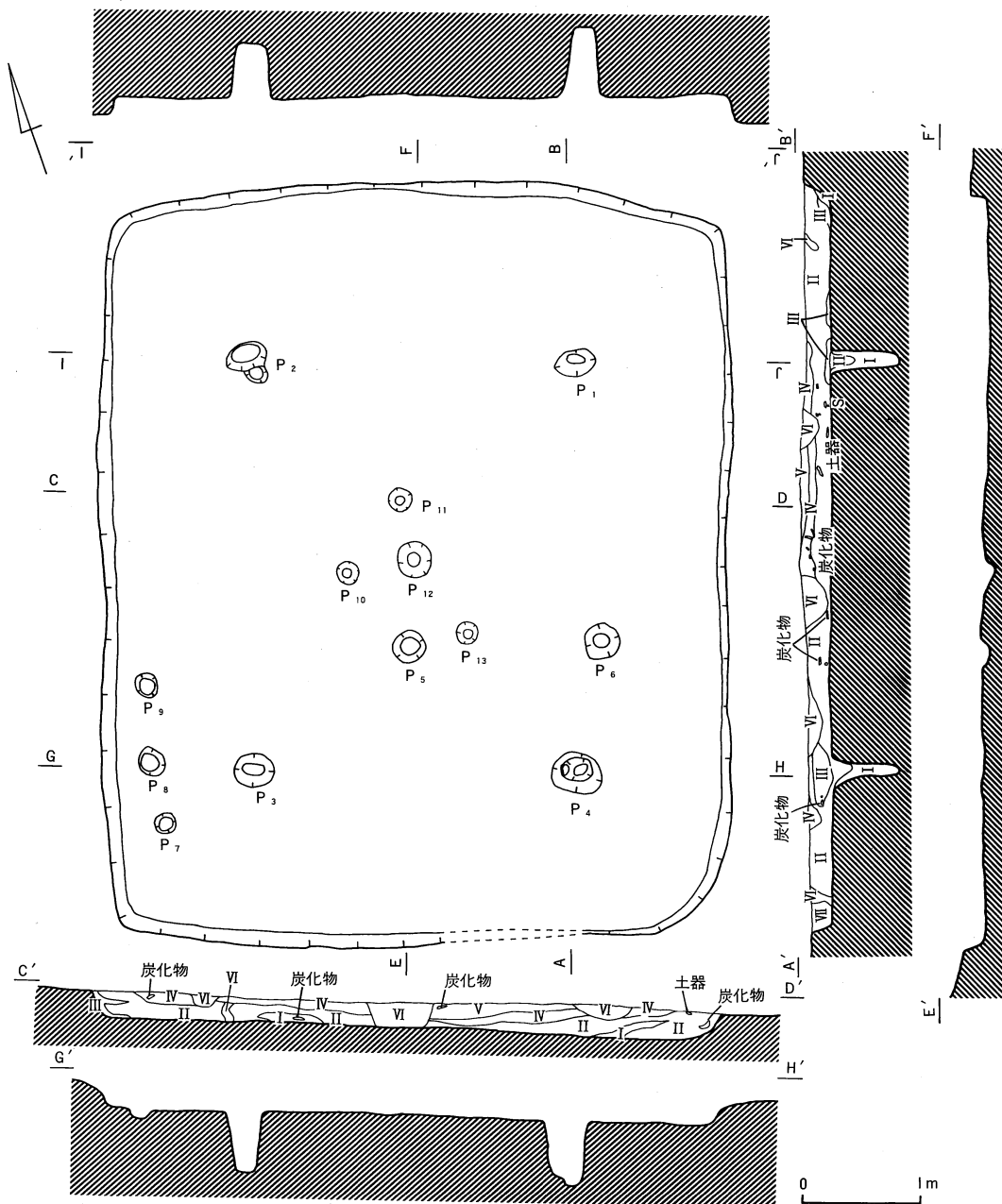
第7图 J1号住居址出土土器实测图



第 8 图 J I 号住居址出土土器拓影一 I



第9图 J1号住居址出土土器拓影-2



Y・2住居址 南北セクション

S = 1 / 20

- I層 (黄褐色土) ローム粒子多量に混入
- II層 (茶褐色土) ローム粒子少量混入、炭化物少量混入
- III層 (黒褐色土) ローム粒子少量混入、炭化物少量混入
- IV層 (黒褐色土) ローム粒子ブロック状に混入
- V層 (黒褐色土) ローム粒子少量混入
- VI層 (攪乱土)

Y・2住居址 東西セクション

S = 1 / 20

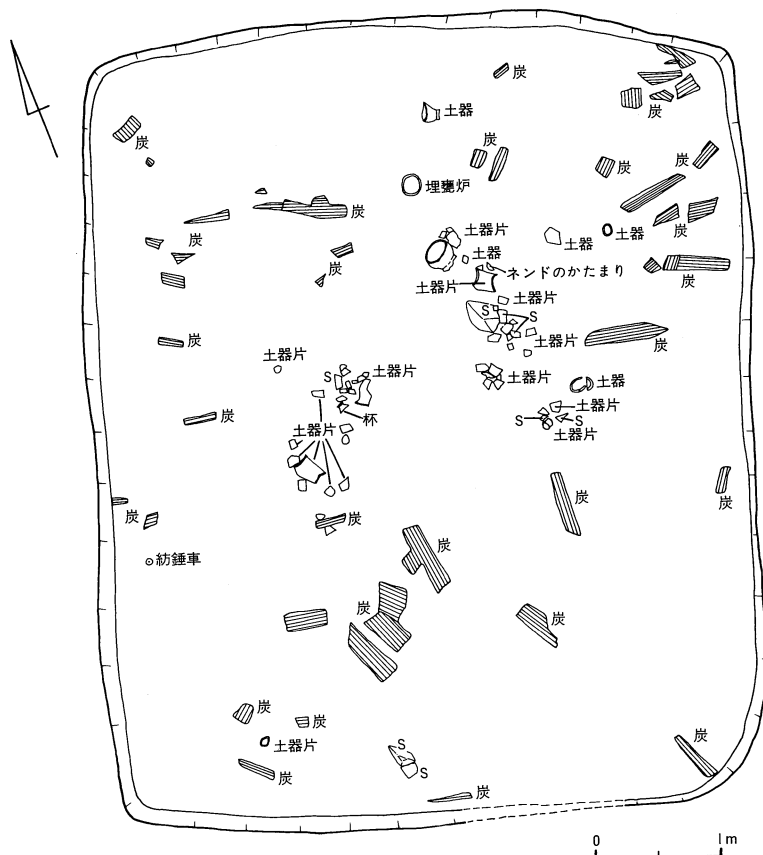
- I層 (黒褐色土) 炭化物少量混入
- II層 (茶褐色土) ローム粒子少量混入、炭化物少量混入
- III層 (茶褐色土) ローム粒子、炭化物、焼土少量混入
- IV層 (黒褐色土) ローム粒子少量混入
- V層 (茶褐色土) 炭化物少量混入
- VI層 (攪乱土)

第10図 Y 2号住居址実測図

2) Y 2号住居址

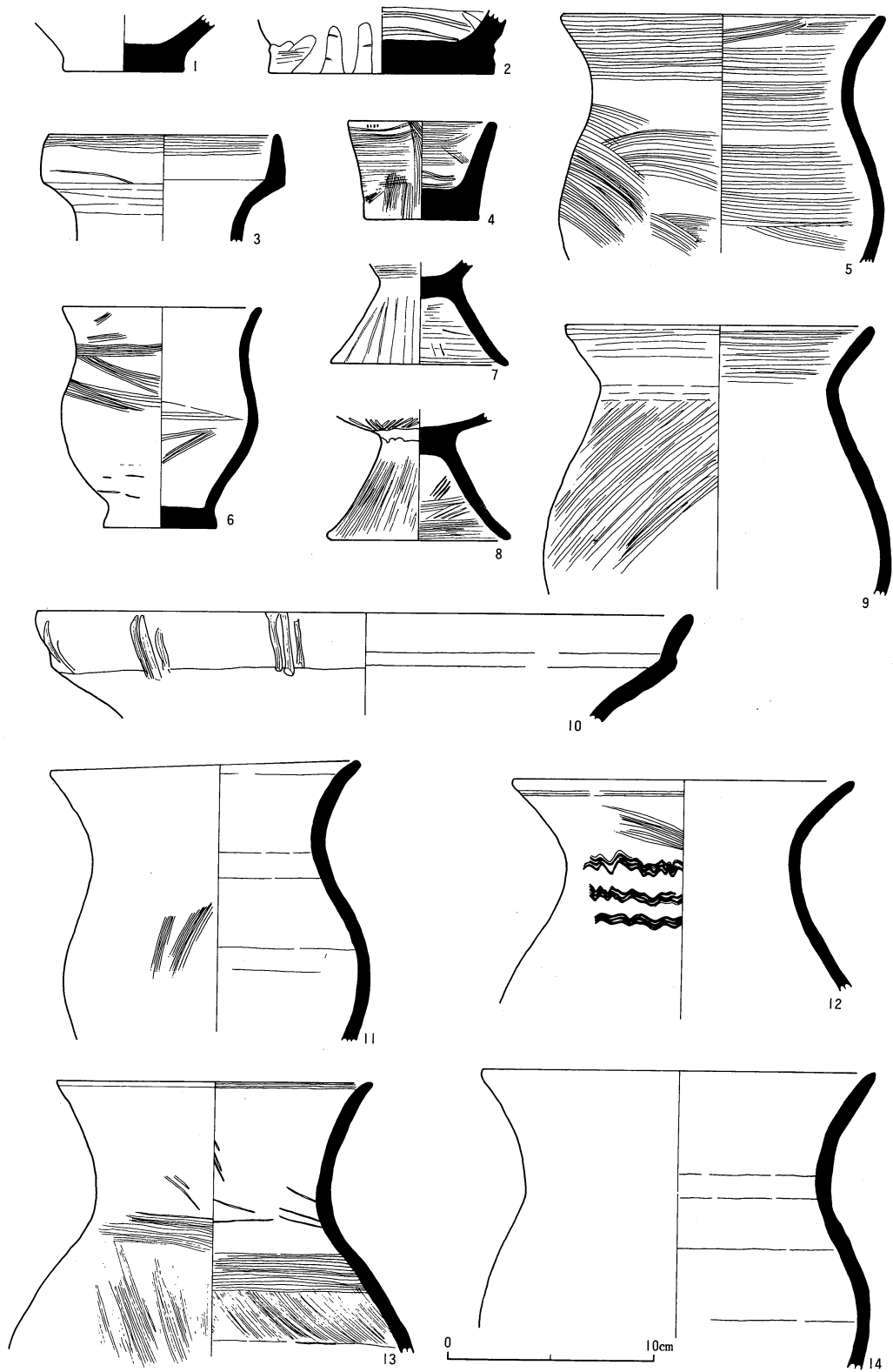
遺構 (第10図)

本住居址は、調査区南西寄りK、L-12~15グリッド内にて検出された。図に示すように住居址の南寄りの壁の一部など、校舎建築における基礎、配管工事により攪乱されていたが、一部分のみであった。排土作業時におけるプラン確認は土色の変化がはっきりしており容易であった。プラン確認時における際、住居址の覆土中から炭化物や焼土が多く認められている。床面精査の際にも、床面に貼り付くように炭や焼土が

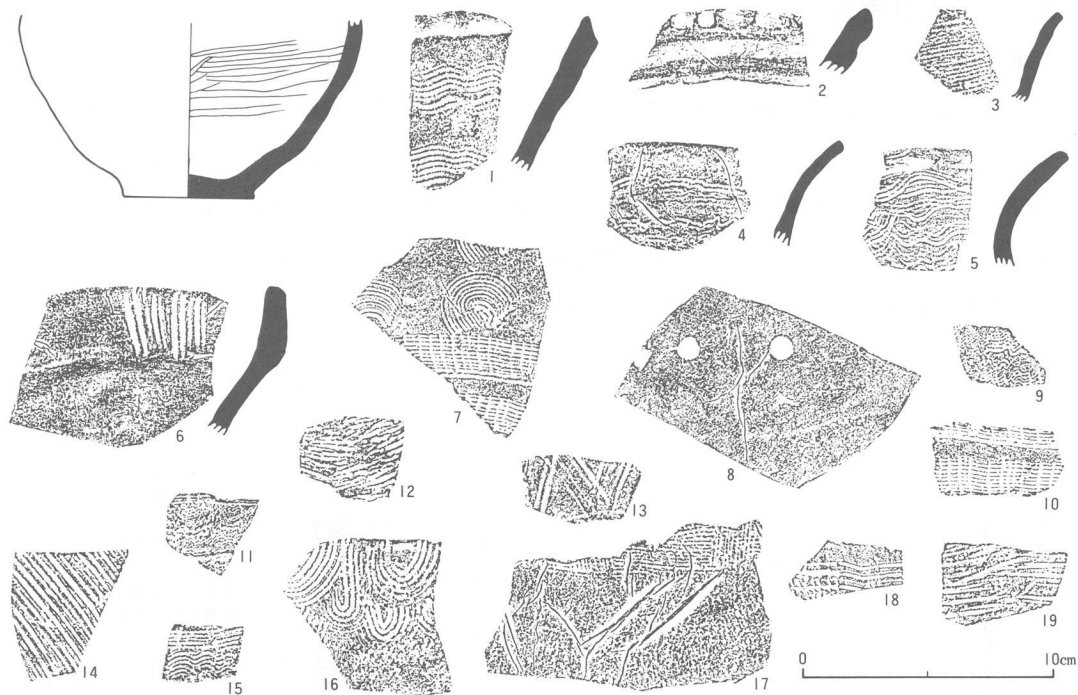


第11図 Y 2号住居址出土土器及び木炭分布図

見られた。このことから、本住居址が火を受けたことは間違いないであろう。平面プランは、主軸方位がN-20°-Eを示し、北壁510cm、南壁500cm、東壁560cm、西壁600cmを測る隅丸方形を呈している。壁高は落込み確認面より14~22cmでやや急な斜壁である。床面はほぼ平らであり堅く踏み固められている。住居址内のピットは、支柱穴と思われるものはP1は33×22,-60cm、P2は32×24,-46cm、P3は34×28,-50cm、P4は42×34,-54cmである。埋壺炉は、北壁側のP1とP2のほぼ中央に位置しており、胴部から底部を欠く壺を逆位に埋設されており、その周り巾10cm程が焼土化している。他の施設として住居址中央に位置する浅いピットであるが、これは第一、二次の調査時においても確認されており、弥生時代後半の住居址にはほとんどこのピットが配されている。食事の時に使うようなものであろうか。本住居址は出土土器から見て弥生時代後半、中島式に比定されよう。



第12图 Y 2号住居址出土土器实测图



第13図 Y2号住居址出土土器拓影

遺物 (第12、13図)

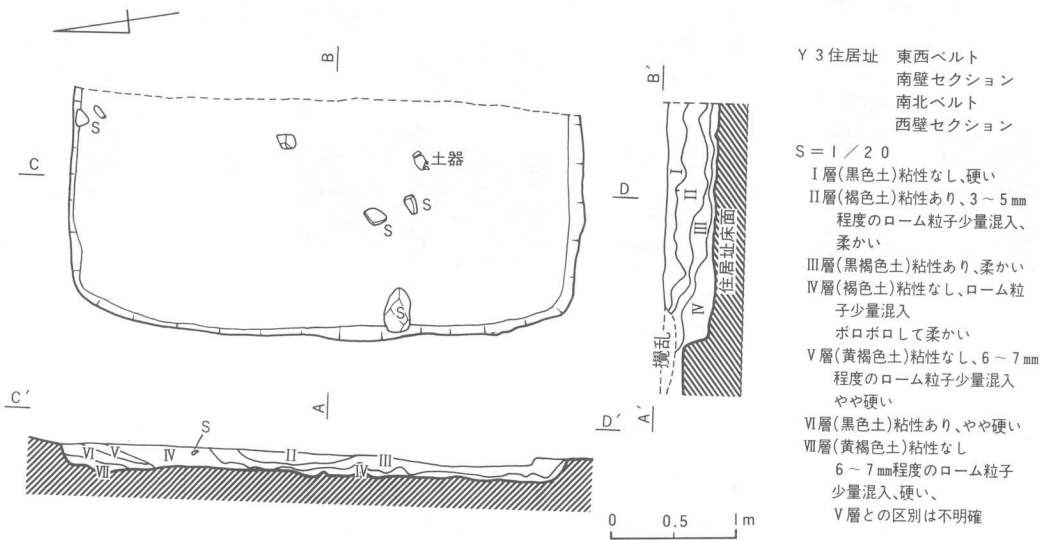
Y2号住居址は多数の土器が出土した。第12図5、9は甕形土器で頸部がくの字状にくびれているが、口縁はあまり強く張り出さない。最大径は胴部の中位になる。器面は灰色あるいは灰褐色を呈し胎土中には金雲母を多量に含んでいる。器面内外は刷毛目痕が全面に施されている。3は頸部からL字状に複合口縁になり、立ち上った口縁は垂直よりやや内湾する角度である。胎土中に石英粒を多量に含み、無文できわめて焼成の悪い土器である。12は頸部が強くくびれ、口縁が大きく外反する形である。器肉が薄く赤褐色を呈している。頸部に三帯の楯描波状文を施している。波状は不規則で低くまとまりのない文様である。口縁部内外には刷毛目痕を施している。14は埋甕炉として逆位の状態で埋設されていた土器で、赤褐色を呈した無文である。内側には輪積み痕が顕著に残り、調整がやや粗雑である。4は盃状の小品で、器面内外を刷毛で丁寧に調整している。胎土中に金雲母を多量に含んでいる。7、8は高杯の脚部片である。7は外面が赤色塗彩され、器面の調整は良好である。

第13図拓影土器の文様は、波状文、簾状文、円弧文、貝殻条痕文系である、6は弱いL字状に立ち上った口縁に直角に沈線が施文されている。器面は刷毛で調整されている。16は円弧文を連続させた文様構成である。胎土には石英粒を多量に含み焼成は下位である。本住居址は出土土器片から弥生後期後半の中島式に比定される。

3) Y 3号住居址

遺構 (第14図)

本住居址は、調査区東側C-6・7グリッドに位置している。遺構の70%程が調査区外にあり、全体を確認することはできなかった。プランは図に示すように西壁の一部のみであり、南北380cmで、東西は500cm程になると予測する。覆土の堆積状況は自然堆積であるが、床面は非常に軟弱ではっきりしない。壁高は19~29cmでやや急な斜壁である。出土遺物もほとんどないがY 2号住居址と平行するものと考えられる。

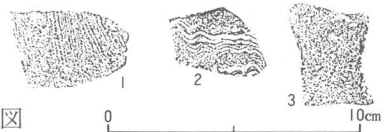


第14図 Y 3号住居址実測図

遺物

本住居址から弥生式土器片がわずかに出土している。第15図

1は刷毛目痕を残し、2は頸部の波状文を施した土器片である。



第15図

Y 3号住居址出土土器拓影

4) J 4号住居址

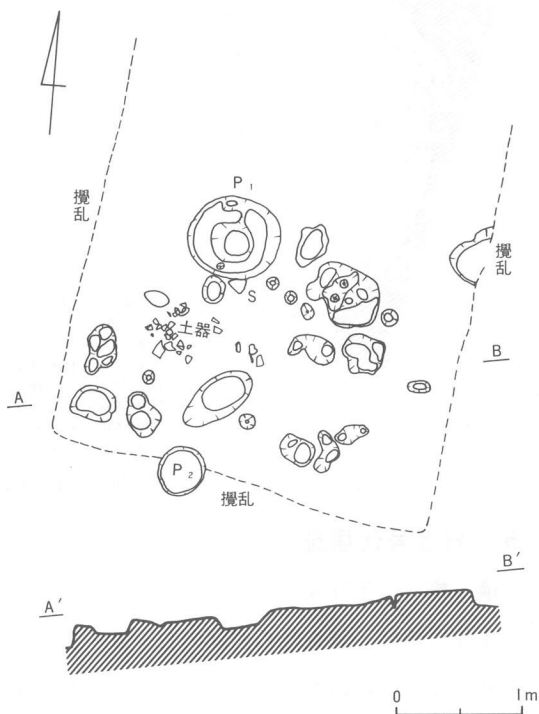
遺構

本遺構はI-4・5グリッドを中心に位置している。調査初期段階において、地層の変化や、遺物出土状況、床面と推定される状況などから住居址として調査を始めた。図に見るごとく三方向が校舎建築時の基礎工事により攪乱されておりプランの確認はできなかった。又、炉址、支柱穴等住居址内部の施設もはっきりせず、住居址としての形態をはっきり留めていない。しかし踏み固められた面やピットの集中している状況、遺物の出土状態等から住居址として位置

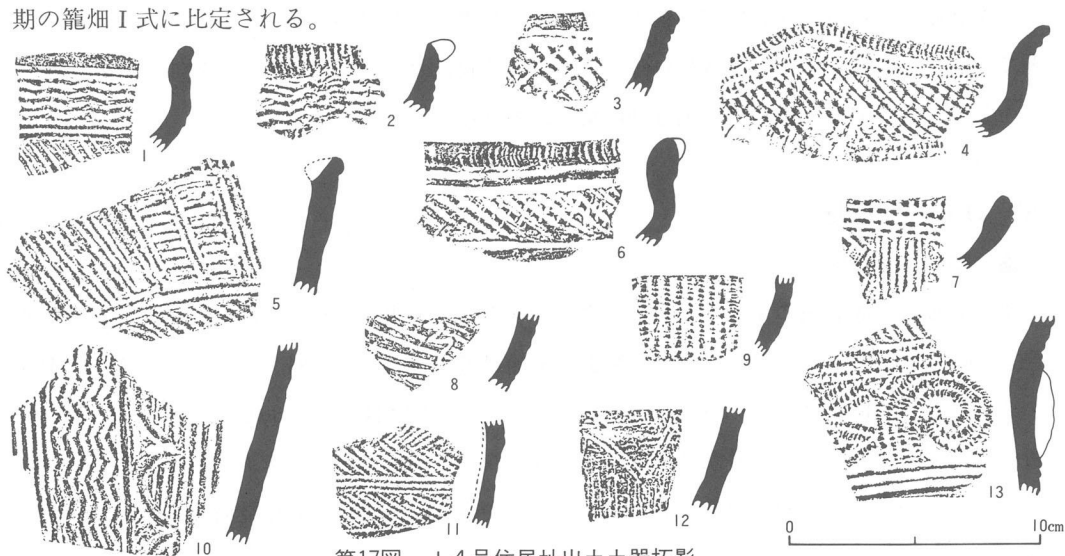
付けた。第39図6に示す獣面把手は本遺構からの出土である。本遺構は縄文時代前期の終末に位置すると考える。

遺物 (第17図)

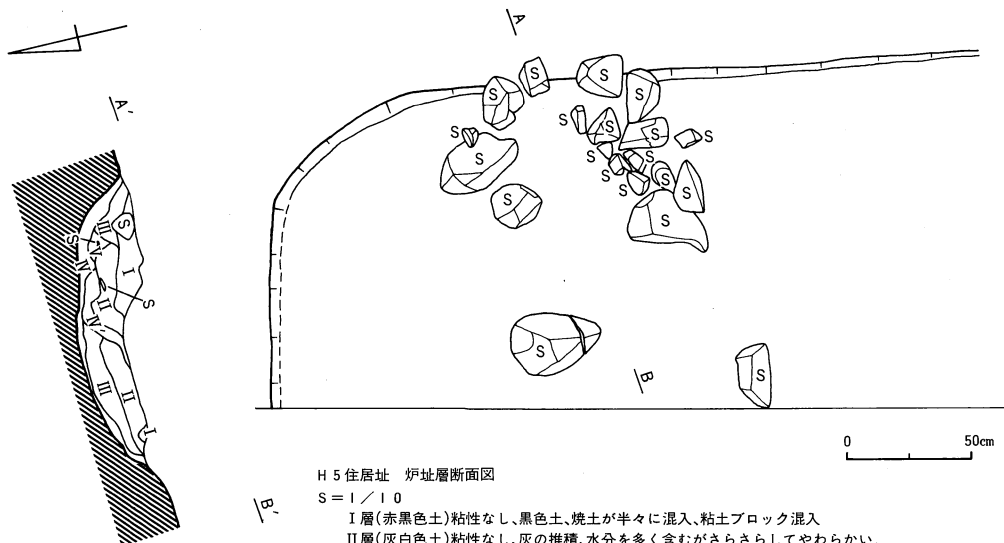
第17図に示した拓影のうち1～7は口縁部である。全体的な文様構成は、半割竹管による施文が主体である。4、6、7は口唇部に半割竹管で連続押し引きして施文している。2は口唇部に直角にごく細い繩を1回ごと押し当て、一見して押し引き施文と区別できない程似ている。4は口縁部が波状になっている一部で口唇部から三段の押し引き隆帯が続き、その直下にソーメン状貼付け文と称される文様が施されている。細長い粘土ひもをななめに貼付け、格子状に構成されている。13は深鉢頸部の一部で帯状の粘土を貼付けた後で、半割り竹管で押し引きあるいはえぐり取って施文している。土器片の色調は暗褐色のものが多く胎土中には多くの金雲母を含み、焼成良好なものが多い。これ等の土器片は前期最終末期の籠畑I式に比定される。



第16図 J4号住居址実測図



第17図 J4号住居址出土土器拓影



H 5 住居址 炉址層断面図

S = 1 / 10

- I 層(赤黒色土)粘性なし、黒色土、焼土が半々に混入、粘土ブロック混入
- II 層(灰白色土)粘性なし、灰の推積、水分を多く含むがさらさらしてやわらかい。
- III 層(焼土)かなり硬く、水分が極端に少ない
- IV 層(黄褐色土)粘性なし、かなり硬く、水分かなり少ない
- V 層(黄褐色土)やわらかく、以下IV層と同じ
- V 層(黒褐色土)粘性少々あり、水分を含みやわらかい、焼土ブロック混入

第18図 H 5号住居址実測図

5) H 5号住居址

遺 構 (第18図)

本住居址は、調査区の西隅のL-9~11グリッド内に位置している。遺構の60%程度が調査区域外となっているため完掘はできなかった。平面プランは、東壁350cm程の隅丸方形を呈すると思われる。東壁の北側コーナー寄りにカマドが設置されている。カマドを中心とする主軸方位は、N-90°Eを示す。カマドは両袖内に平石を立てて構築しており、その周りを粘土を含む赤土などで固められていた。カマド内には焼土が10cm程堆積しており、繰り返し使用されたことを物語っている。住居址内の覆土は褐色土を基調とした自然堆積であると思う。床面は軟弱ではっきり確認することは難しいほどである。遺物はカマド周辺から土師器小片がわずかに出土したのみである。本遺構は国分期前葉と思われる。

6) J 6号住居址

遺 構 (第19図)

本住居址は、調査区の4・5-E・Fグリッド内にて検出された。平面プランは、ほぼ円形を呈し、主軸方位はN-8°Wを示し、長軸384cm、短軸270cmを測る。主柱穴と思われるものはP1のみでP2、P3は浅い凹みで床面下10cm程度である。P1は34×30、-30cmを測る。壁は垂直に近い急な立ち上りを示し、壁高は落込み確認面より13~20cmである。床面はほぼ平らである。南西と南東の壁及び床面に攪乱が認められる。土の変化による落込み確認時においては、かなりはっきりしたプランであったが覆土を取り除いた後の状況があまり良好な状況でなかったの

は予想外であった。住居址内施設としては、堅穴炉、貯蔵穴等であり、炉は住居址の中央やや南寄りに位置し径120cm、深さ25cmのほぼ円形である。中央部がわずかに焼土化している。

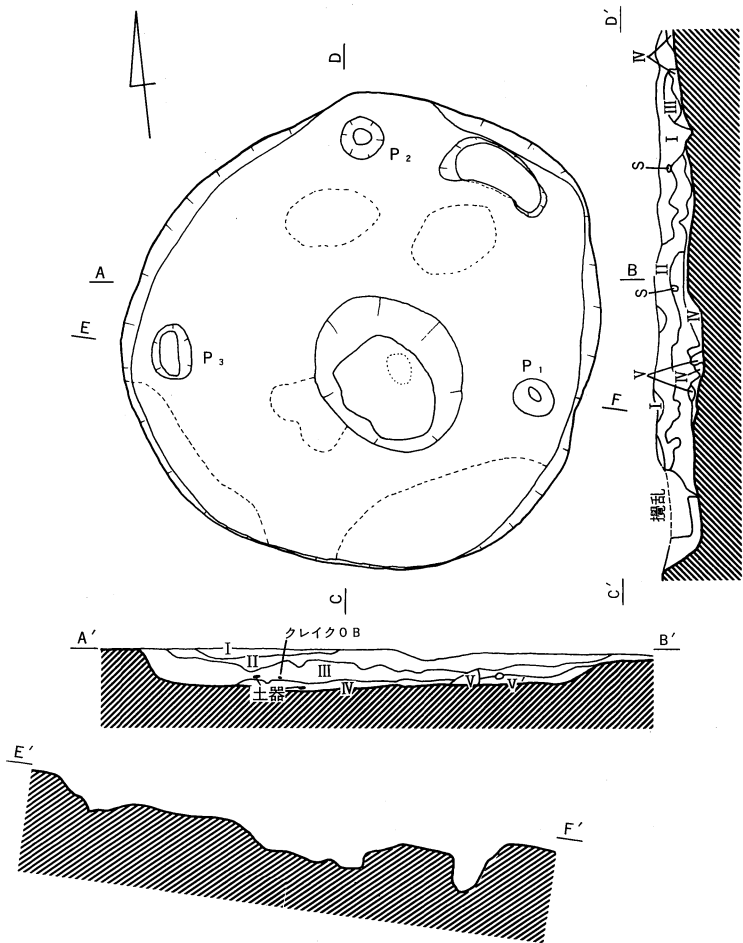
遺物 (第20図)

J 6号住居址について遺構の調査状況中に感じたことであるが、全体的に軟弱で、長期間使用していた住居址とは考えられなかった。遺物においても同様で、住居址に直結するような確実な土器がきわめて少ないのである。

出土土器片においても混入したものも含まれている。第20図に示した実測土器は口縁部分の一部である。口縁部の径は18.6cmを測り、頸部が強く張り出し大きく丸味をもたせている。胴部に下ってくびれるが以下は欠損で下明である。胴部からもう一度張り出してから底部になるものと推測

する。文様は径9~10mmほどの円柱状の工具を器面に押し当てながら引いて凹線を付けている。又半球状の凹み連続文も円柱状工具の端部を使っている。文様の主体は渦巻文である。

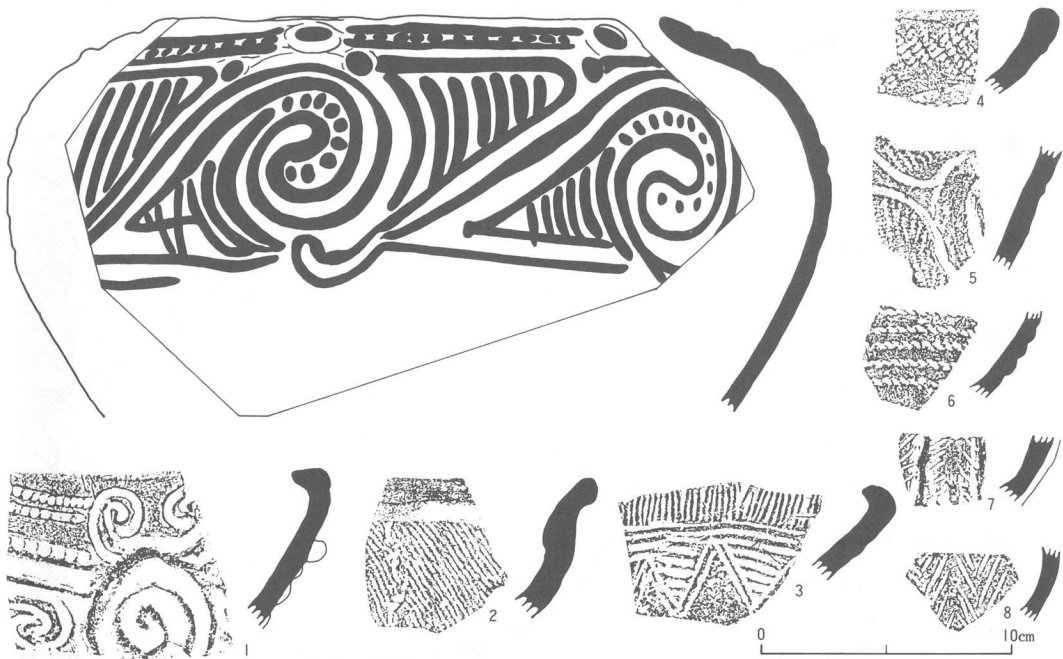
拓影1は甕形土器の口縁部片で、口唇部に蓋受け状の突起が付けられている。文様は渦巻隆線文や連続刺突文などが施されている。茶褐色を呈した焼成良好な土器で、曾利II式平行期である。3は口縁部にごく細い粘土紐を並べている。その他は半割竹管による施文で、前期末籠畑期の土器片である。



J 6住居址 東西ベルト北壁セクション
南北ベルト東壁セクション
S=1/20

- I層(黒褐色土)粘性なし、締まっている
- II層(褐色土)少々粘性あり、締まっている
- III層(褐色土)少々粘性あり、柔らかい、ローム粒子少量混入
- IV層(黄褐色土)弱冠粘性あり、やや締まっている
- V層(黄褐色土)粘性あり、柔らかい
- V層(黄褐色土)粘性あり、柔らかい、V層よりローム粒子を多く含む

第19図 J 6号住居址実測図

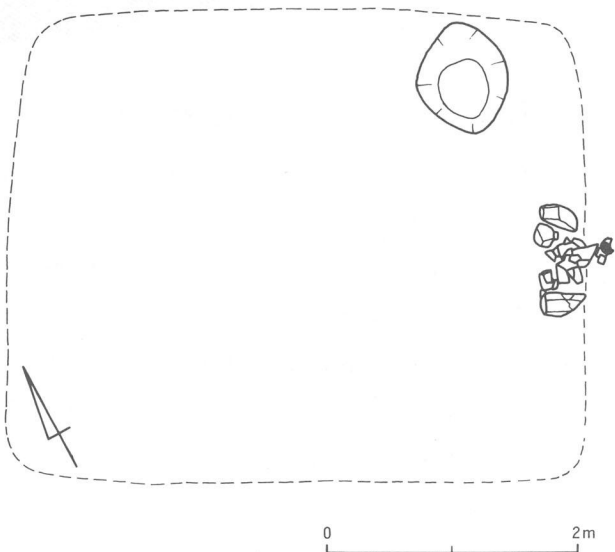


第20図 J6号住居址出土土器拓影

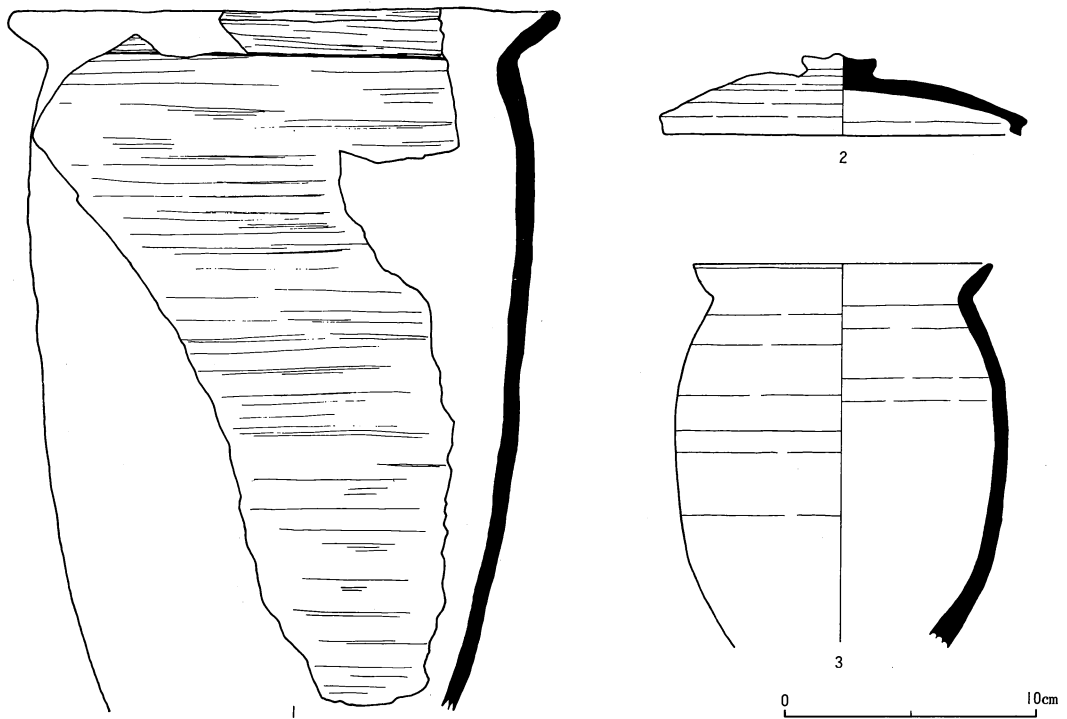
7) H7号住居址

遺構 (第21図)

本住居址は調査区のD、E-9、10グリッド内にて検出された。しかしはっきりとした遺構はカマドだけである。床面と推定される範囲に厚さ5~10cm程焼土や炭化物が広がりそれによってプランを推測した。それによると長軸460cm短軸370cmを測る。主柱穴は認められず、カマドの北側に80×75、-20cm程の凹みが認められた。カマドは、東壁ほぼ中央に位置し、袖部を形作る芯石がカマドの基部を掘り込んで固定されている。火床の中央やや奥に支脚として用いられた柱状の石が立っている。カマド内から土師器片が出土している。出土土器からして国分期前葉と思われる。



第21図 H7号住居址実測図



第22図 H 7号住居址出土土器実測図

遺物 (第22図)

本住居址出土の土器で図示できたものは第22図の3点のみである。1は鳥帽子形を呈した土師器で、頸部がくの字状にくびれ口縁が外反している。器面内外に刷毛目調整痕を残している。2は須恵器の坏蓋で天井部が平らになっている。宝珠形の摘みが付き、低い摘みである。3は小型甕で器面全面にロクロ成形痕を残している。

2 土 塚

1) D 1号土塚 (第23図)

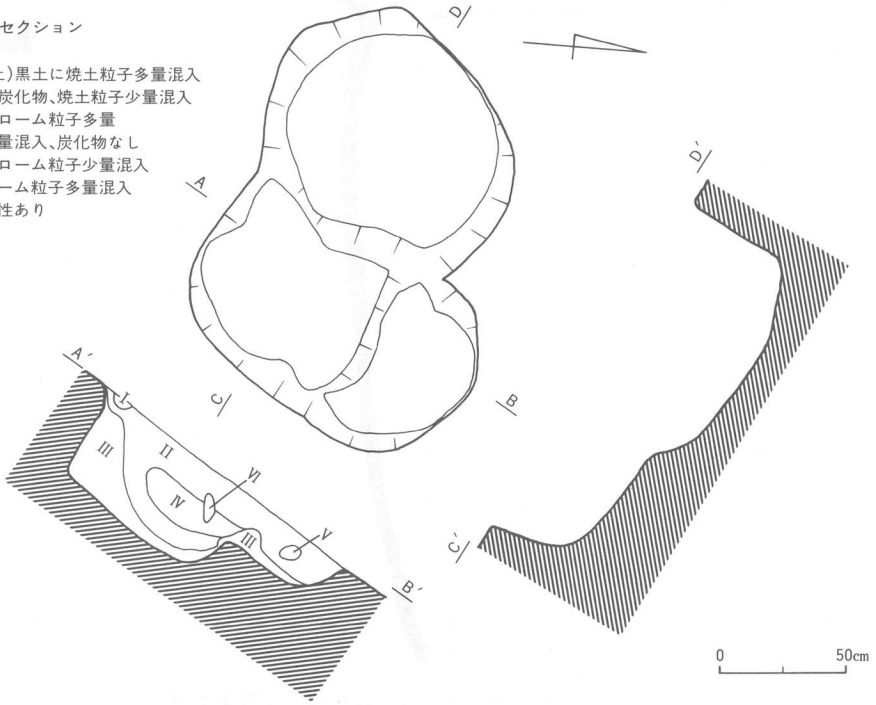
本土塚は、H-12、13グリッドに位置している。平面プランから見ると3つの土塚がくっついた状態である。覆土は6層に細分されるが、上層は焼土粒が混入している。土塚底部はほぼ平らでありある程度の堅さを有している。出土土器は二時期に分けられる。土塚の性格は貯蔵穴であろう。

遺物 (第24図)

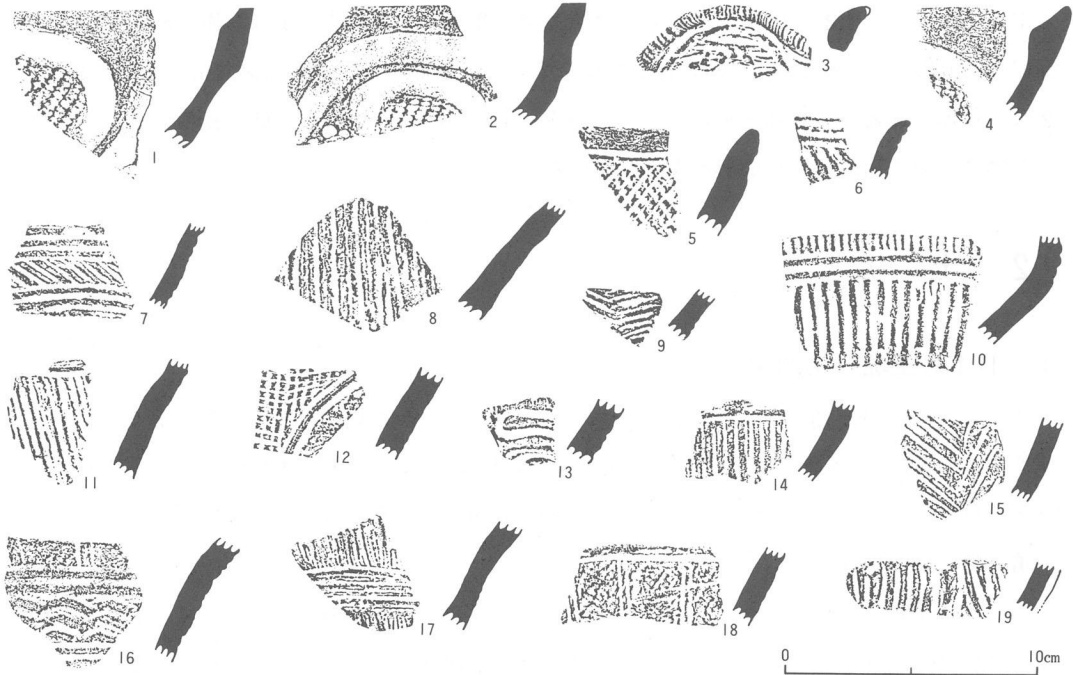
本土塚は遺構で示したごとく二次期において掘られたものである。1、2、4、13、14、19などは曾利期の後半に比定されるもので、磨消縄文と沈線文とによって文様構成がなされている。内面はよく磨かれ美しい器膚を呈している。他は半割竹管を主体施文具とした土器片で、

土坑 I (南北) 東壁セクション
S = 1 / 10

- I層(黒赤褐色土)黒土に焼土粒子多量混入
- II層(黒褐色土)炭化物、焼土粒子少量混入
- III層(黒褐色土)ローム粒子多量
焼土粒子少量混入、炭化物なし
- IV層(暗褐色土)ローム粒子少量混入
- V層(黒色土)ローム粒子多量混入
- VI層(黒色土)粘性あり



第23図 D 1号土坑実測図



第24図 D 1号土坑出土土器拓影

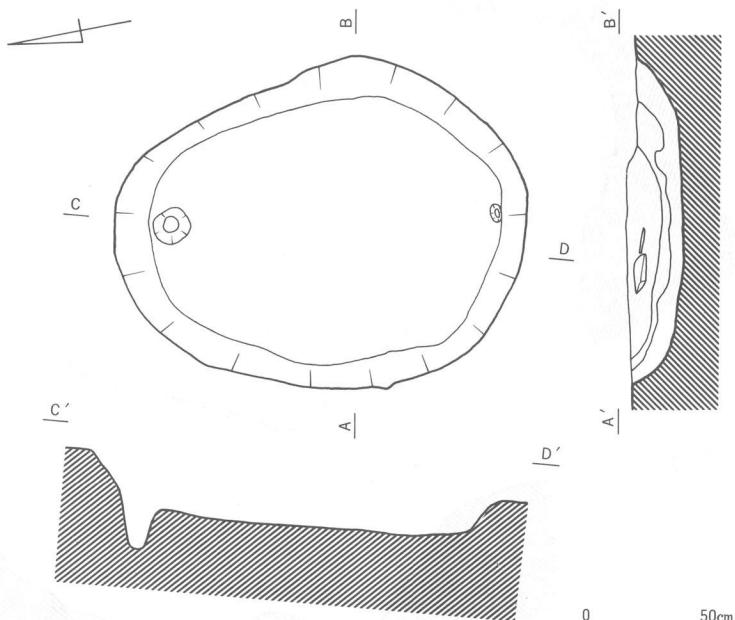
前期最終末に比定されよう。3は口縁突起部で、半割竹管による連続爪形文が施文されている。他の土器片も格子刻目文や平行沈線文などが主たる文様構成である。内面に刷毛目状調整痕を残すものもあり焼成は良好である。

2) D 2号土坑

遺構 (第25図)

本土坑は調査区ほぼ中央のG、H-9グリッドに位置する。平面プランは南北165cm、東西130cmを測り、覆土は3層によって形成されている。深さは25cmと少なく、底部は舟底状を呈しやや堅くなっている。壁はゆるやかに立上っている。

中央やや北寄りを水道管が横切りその部分が攪乱されている。

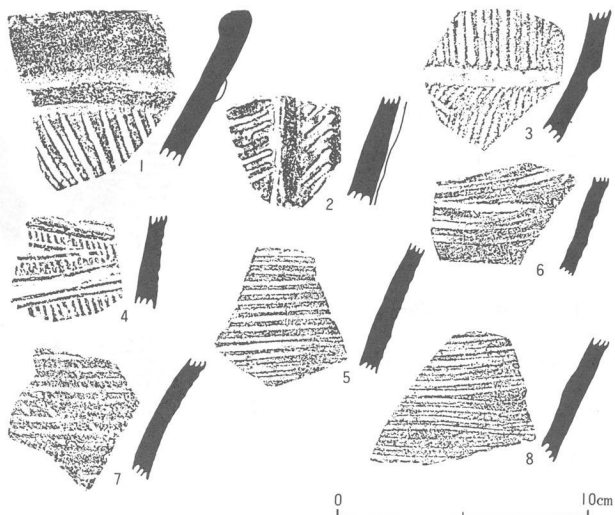


土坑2 東西断面(南壁セクション)
 I層(黒褐色土)炭化粒子を混入
 II層(黒土)粘性あり、やや柔かい
 III層(暗赤褐色土)黒土に焼土粒子混入

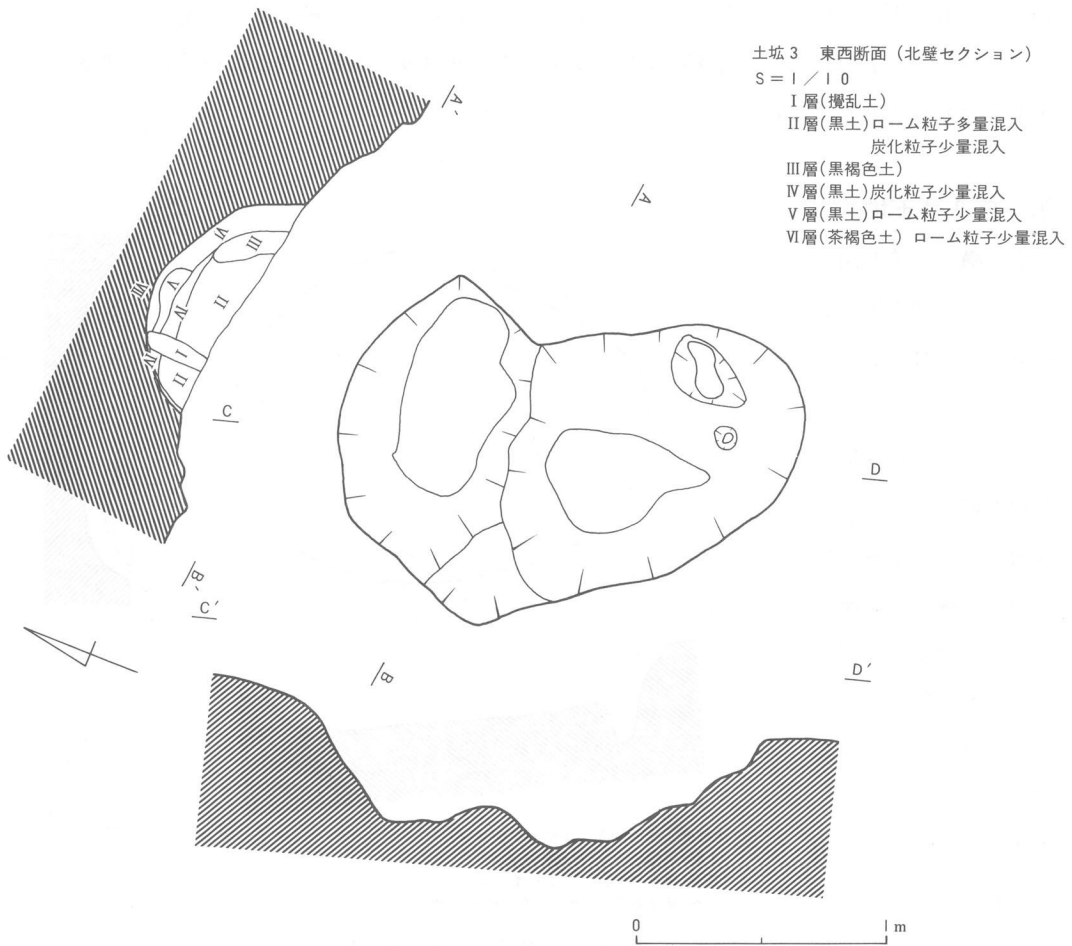
第25図 D 2号土坑実測図

遺物 (第26図)

D 2土坑内には複数の時代の土器片が混入している。1、2は曾利II期に比定されると考えられるもので、1は口縁部で、無文帯が巾4cm程あり、その下に巾広の隆帯が横位に走っている。口唇部は内側に折り返えし口縁になり、蓋付状の突起となっている。4は小さな半割竹管によって縦横に文様構成されており、前期最終末から中期初頭に比定されるものである。



第26図 D 2号土坑出土土器拓影

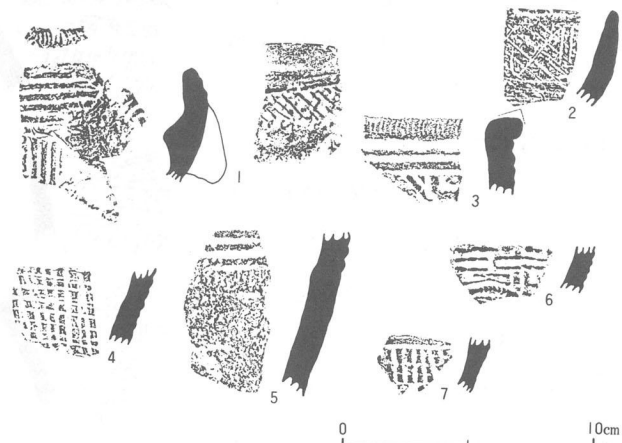


第27図 D3号土坑実測図

3) D3号土坑

遺構 (第27図)

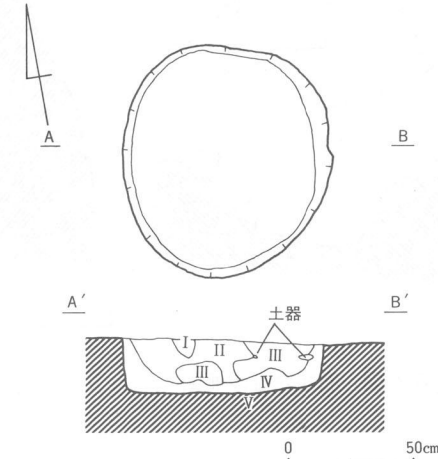
本土坑はL-11、12グリッドに位置している。この土坑も二つの土坑が重なっている。北寄りの土坑は深さ45cm、南側は53cmとやや深い。底面もはっきりせず凹凸がかなりある。覆土は三層よりなる。本土坑の南側はY2号住居址が重なっている。



第28図 D3号土坑出土土器拓影

遺物 (第28図)

第28図1～3は口縁部土器である。1は口縁部に下向きに高さ1cm程の突起が付けられている。内側には口唇部から3cm程下って蓋付状の突起が付けられソーメン状の細い粘土ひもが付いている。他の土器片も半割竹管で施文されたもので籠畑式に比定される。



土坑4 東西断面(南壁セクション)

S = I / I 0

- I層(黒土)粘性あり、硬い
- II層(黒褐色土)粘性あり、ローム粒子少量混入、やや硬い
- III層(黒土)粘性ややあり、やわらかい
- IV層(黒土)粘性ややあり、硬い
- IV層(黒褐色土)粘性なし、やわらかい、ローム粒子少量混入

第29図 D4号土坑実測図



第30図 D4号土坑出土土器拓影

4) D4号土坑

遺構 (第29図)

本土坑は調査区北寄りのG-3グリッドに位置している。平面プランは南北にやや長い隋円形を呈し90×83cmを測る。深さは落込み確認面より20cmと浅い。壁は直に近い立上りを呈し、底面はほぼ平らになっている。覆土は二層である。出土土器から縄文時代前期最終末の籠畑期平行と考えられる。

遺物 (第30図)

土坑1～3と同じく前期最終末から中期初頭への移行期の土器片を出土している。すべて半割竹管を施文工具としている。胎土中に金雲母を多く含み焼成良好である。

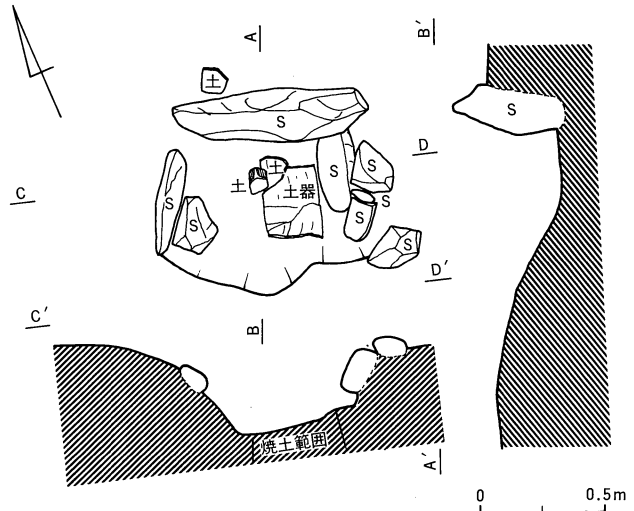
3 炉址

1) 石組炉址

遺構 (第31図)

本遺構はJ1号住居址の東南D-11、12グリッドより検出されたものである。この石組炉址

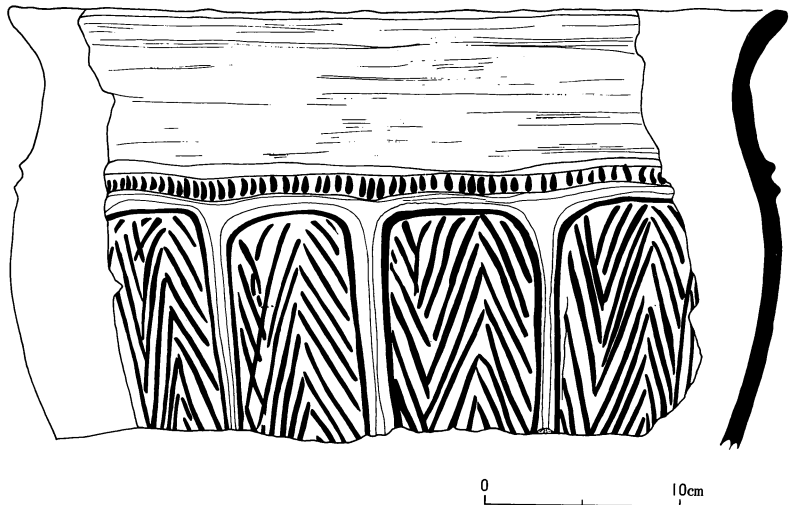
は住居址内施設か、あるいは独立したのか、検出された時点では不明であったので、付近を精査したが攪乱が多く明確な遺構は検出されなかった。炉址は北に背を向けて75×45cm程の長方形の石を立て、両袖にも石を並べて三方向を囲んで石を組んでいる。この状況からみて、南側が焚き口である。南側の焚き口からゆるやかに下がり火床部は深さ35cmを測る。中心部は火熱によって焼土化しており、かなりの堅さを有している。炉の中には口縁部を東にして大型土器片が入っていた。これらの状況を考え、本遺構は屋外の独立した施設として考える。又炉内に入っていた土器片は曾利II期に平行する時期である。



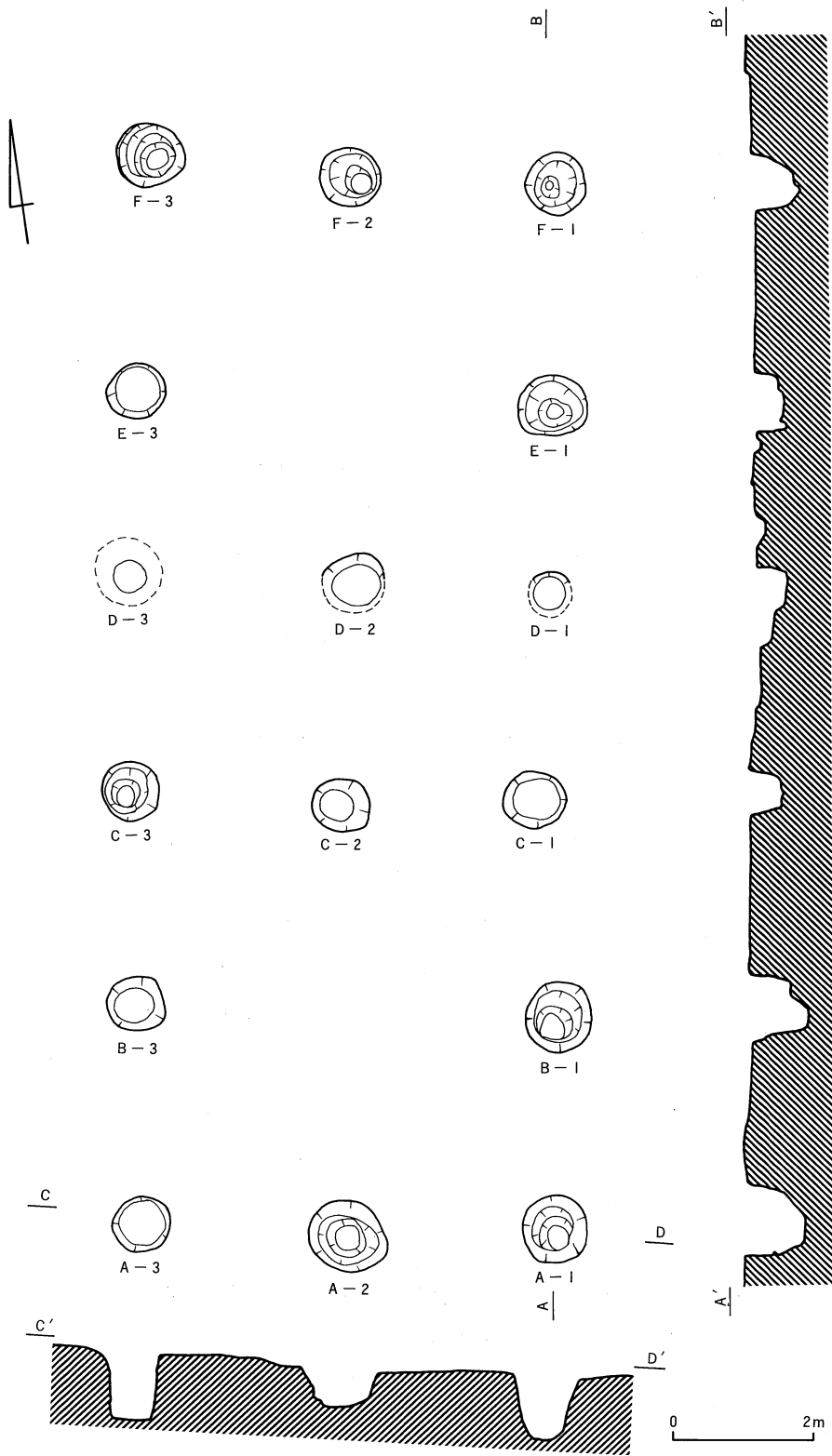
第31図 石組炉址実側図

遺物 (第32図)

石組炉址内から出土した土器片である。口縁の径が40cmという大型深鉢形土器で、口縁が外反し、頸部にかけ無文帯を構成している。肩部に隆帯が二本横に走り、下側の隆帯から8～9cmの間隔で太い隆帯が垂下している。それによって区画された内側は綾杉状沈線文で埋められている。焼成良好な土器で曾利期後半に位置する。



第32図 石組炉址内出土土器実側図



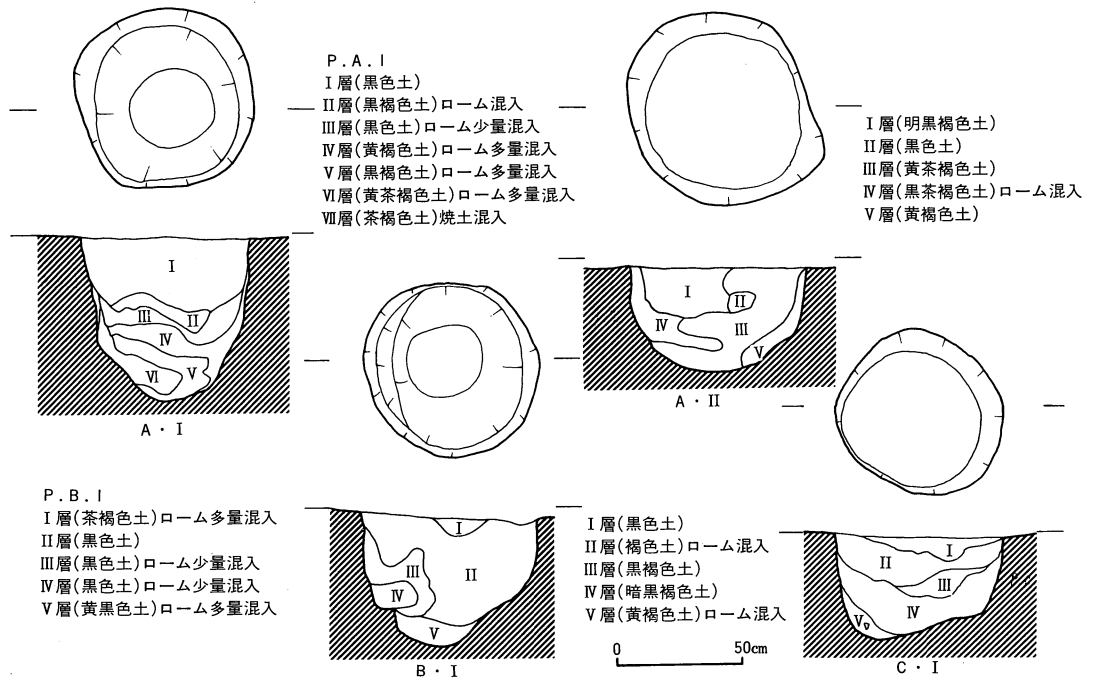
第33图 掘立建造物址実測図

4 掘立建造物址

1) 掘立建造物址

遺 構 (第33図)

本遺構は調査区西南のI、J、K-3、4、5、6、7、8グリッド内にて検出された。この遺構の発見は、機械による排土後の整地作業中に第33図に示すA、B列のピットが検出されたところから始まった。二列だけの検出状況を見ただけでも、以前における発掘調査でもこのような状況の遺構は記憶になかった。どのような遺構になるのか非常に興味をもちながら作業を進めた。最終的には第33図に示すような平面プランになった。作業進行中にA、B、C列の8個のピットが検出された時点では、これだけのプランであろうと考えたが、すぐにE、F列まで延長されていることが確認された。C列とE列の間隔がどうも不自然な感じがするため、その間を精査したところ、そこを校舎の基礎が通っておりその時に攪乱されたことが明らかになった。D3ピットは底部のみ確認され、D1、D2のピットは北側のみ検出されている。周囲にピット列が拡大されるのではないかと予想したが、結果は総柱数16本にて構成されている。主軸方位はほぼNを示している。配列ピットを一棟の建造物と考えた場合、A、Fのピット間距離は7m50cm、東西3mを測る。これが一棟の建造物ならば大変大きなものであり、このような配列状況の建造物址は当町における発掘では初めてのものである。南北の柱穴間距離は平均1m50cmで、柱穴はB2とE2を除いて縦横に1.5m間隔で掘られている。現場において配列状況を検討した時A～C列の8個よりなるまとまりと、D～F列のまとまりが別々の一棟づつではないかと考えたが、そうした時、C列とD列間が他の間隔と全く同じであり、又、二棟と考えた場合にはあまりにも近すぎると考える。一棟の建造物と考えた時、A～C列の3×3mの正方形の一室と、D～F列でやはり3×3mの正方形の一室があり、C-D間は土間のままで通りぬけができるような、いわば門のような形をした建造物ではないだろうかと予測した。又、7.5m×3mの一室だけの建物とも考えたが、決定づけるところまではいかなかった。柱穴の状況を見ると、大きさは40～50cmのほぼ円形で深さにはかなりのバラツキが見られる、浅いものは20～25cm、深いもので50～55cmであり、底部の状況は平らでかなりの堅さを有しているものが多い。又、柱穴底部が径20cmほどの円形に一段低くなっているものが7個確認された。これは掘立て柱の大きさを示すものではないかと考えられる。この建造物址の時代であるが、柱穴内より出土した宝珠形の摘みが付いた須恵器の蓋がこの時期のものと考えられる。これはH7号住居址から出土したものと同時期と思える。これによると平安時代初頭の国分期前半と考えられる。いずれにしてもこの遺構はこれまでにあまり類例を見ない。今後同種の遺構の発見を待つと共に研究をしたい。

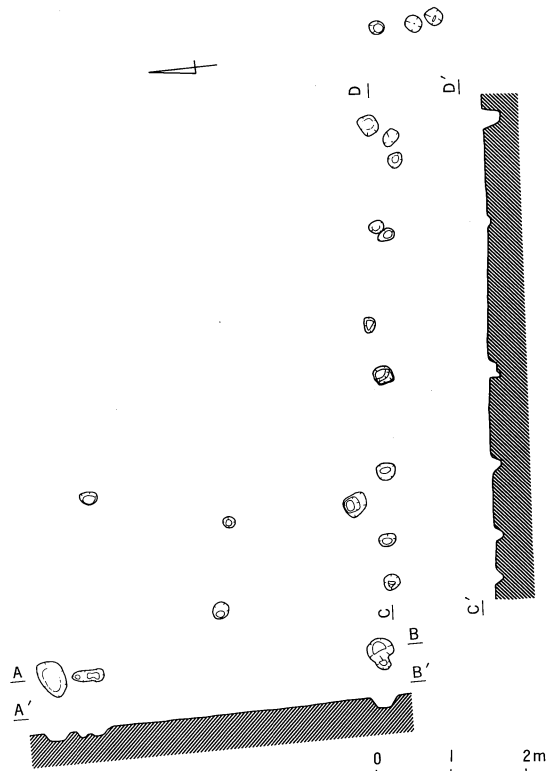


第34図 掘立建造物址柱穴地層断面図

2) ピット群

遺構 (第35図)

本遺構は調査区東北の角、C、D、E-3、4、5グリッド内にて検出された。機械による排土後最も早くその配列状況が確認された。図に示すようにC-D断面の列が検出された時は、この列に対応する配列が検出されるものと予測して調査を進めたが、検出されなかった。これは校舎の基礎の範囲に入ってしまったことが当然考えられる。ピット覆土は一色の黒土で、遺構中では最も新しい時期のものと考えられる。

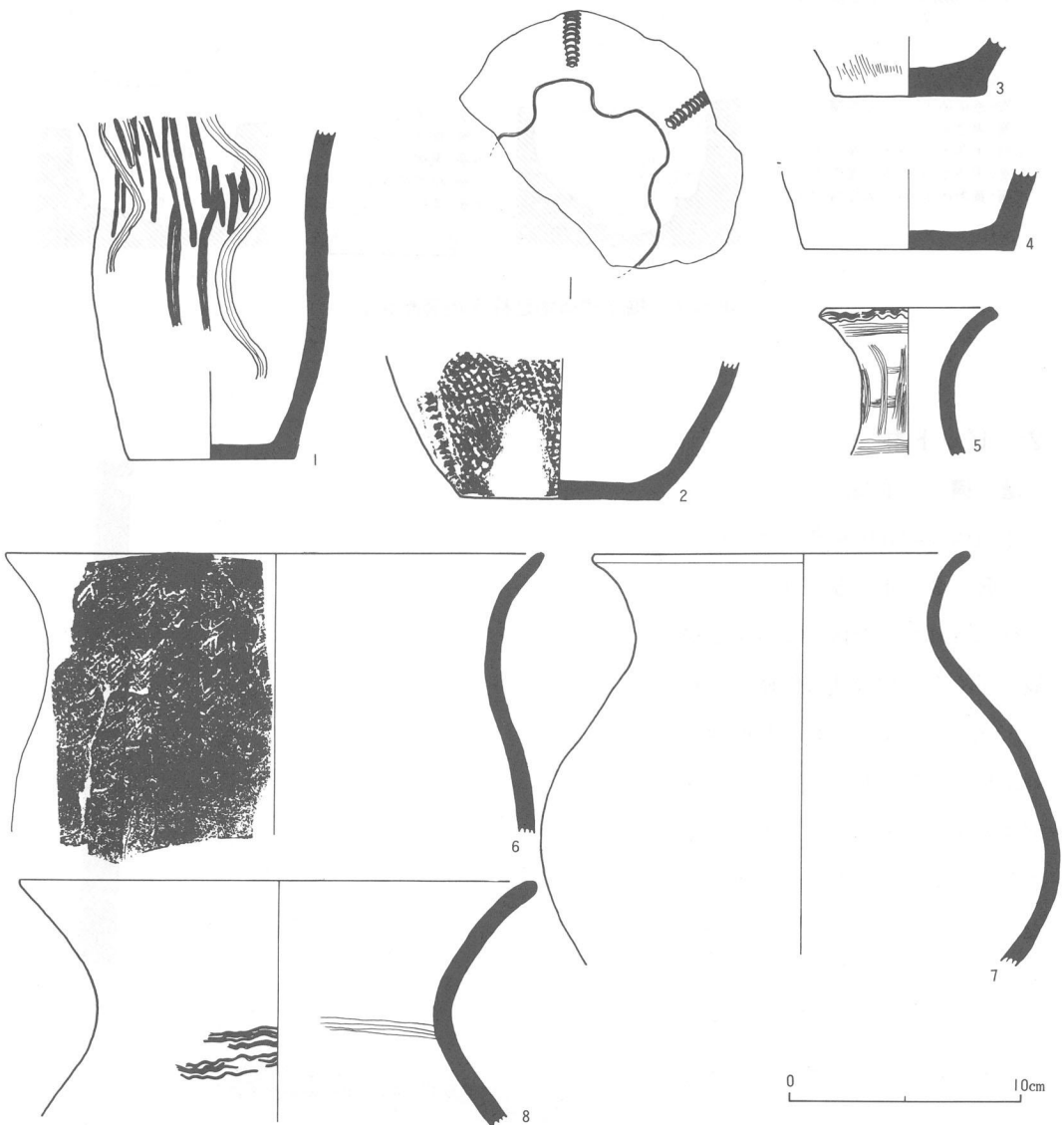


第35図 ピット群実測図

5 グリッド出土土器

遺物 (第36、37、38図)

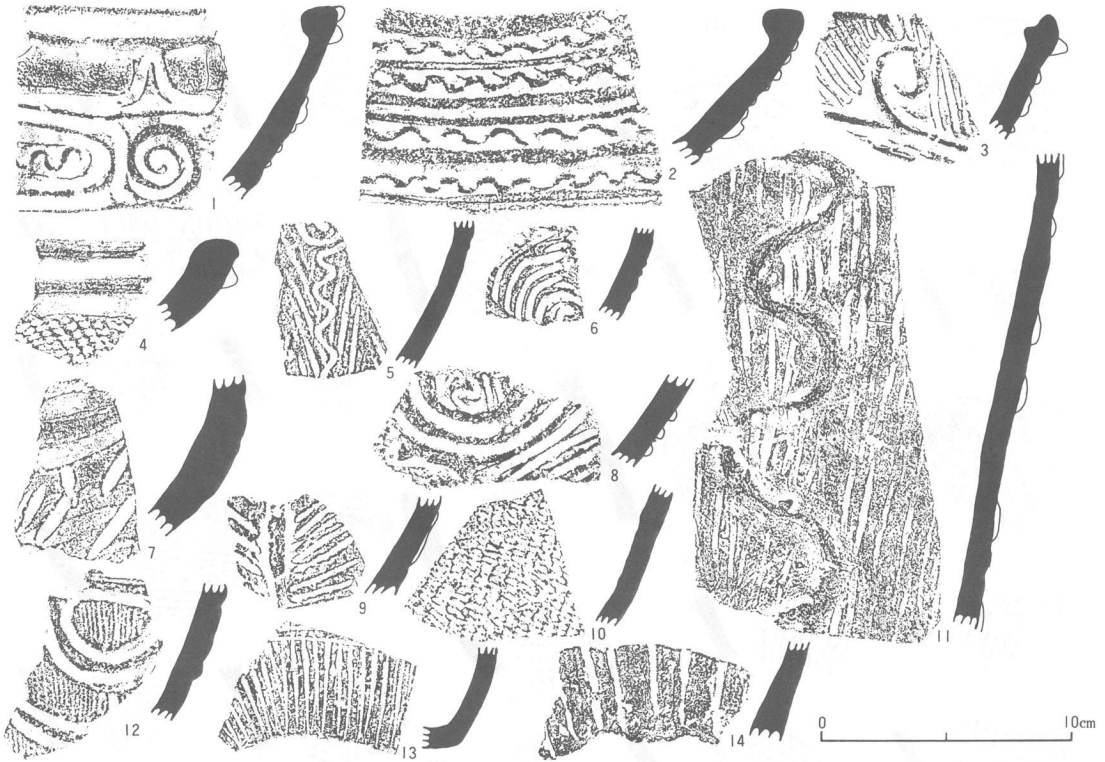
グリッド出土の土器は多量であるが第36図には実測可能なものを、第38図には特徴的な土器片を拓影とした。第36図1は小型深鉢形土器で、胴部がわずかにくびれ、口縁部に向ってゆる



第36図 グリッド出土土器実測図



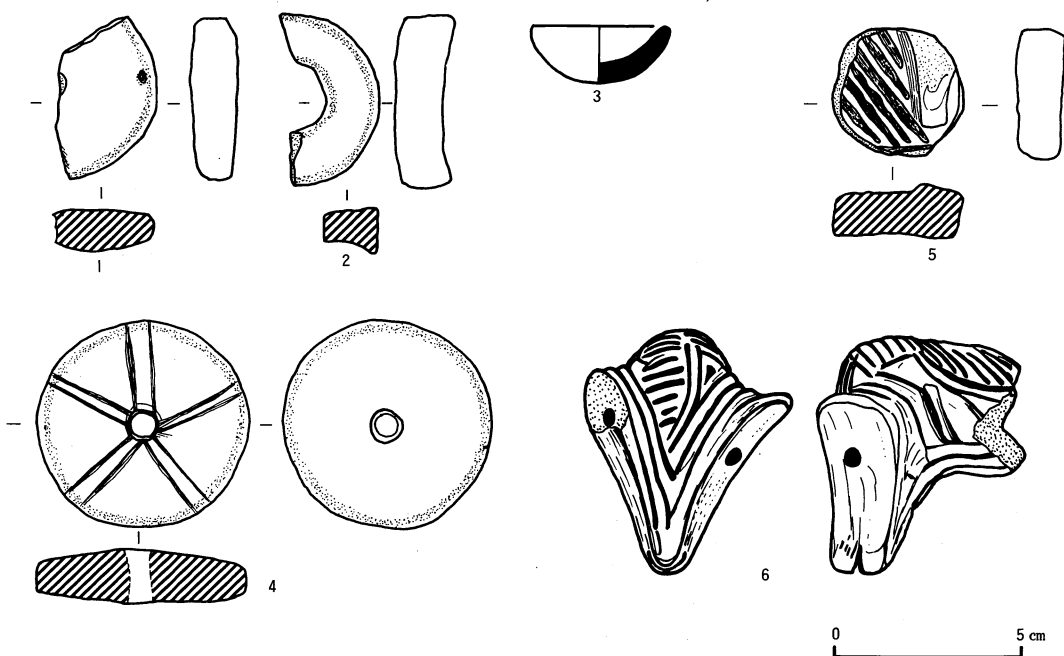
第37図 グリッド出土土器拓影—1



第38図 グリッド出土土器拓影一2

やかに外反している。蛇行懸垂文だけが残し、その内を条線が描かれている。2は底部が桜の花状を呈した土器で全面に縄文を施し、垂下する隆帯の上を半割竹管で連続押し引きしている。5は壺の頸部から口縁部で、口唇部にキザミを付けている。この土器は胴部が大きく張り出す形を呈するものである。6～8も弥生式土器で波状文を施したもの又は無文のものもある。弥生後期後半の中島式土器に比定される。

拓影土器のうち第37図1～8は早期終末に位置する土器群で類例として伊那市伊勢並遺跡、高遠の宮の原遺跡などから出土している。又当町からは上の平遺跡から少量の出土であるが確認されている。器肉が4mm前後と薄く、器面に指圧が認められ、口縁部がゆるやかな波状を呈するものもある。文様構成は細い粘土紐をひらたく貼り付け隆帯文とし、この上に貝殻条痕文を全面に施している。1だけは隆帯の上に細い列点文を施してある。又1、8は貝殻の腹縁で付けた弧状の並列した条痕文が見られる。9～11は諸磯C式に平行するもので、平行条線の地文の上に、ボタン状貼り付けがなされ、又紐状貼り付けに半割り竹管による連続押し引きの爪形文が施されている。14～31は施文工具に半割り竹管を用いた籠畑期に平行する土器片である。J4号住居址から出土している土器片と共通するものが多い。格子目文や連続爪形文が主たる文様構成である。多くは赤褐色を呈し焼成良好である。以下に示したものは中期後半の曾利II式期に比定されるものが多い。



第39図 出土土製品実測図

6 土製品 (第39図)

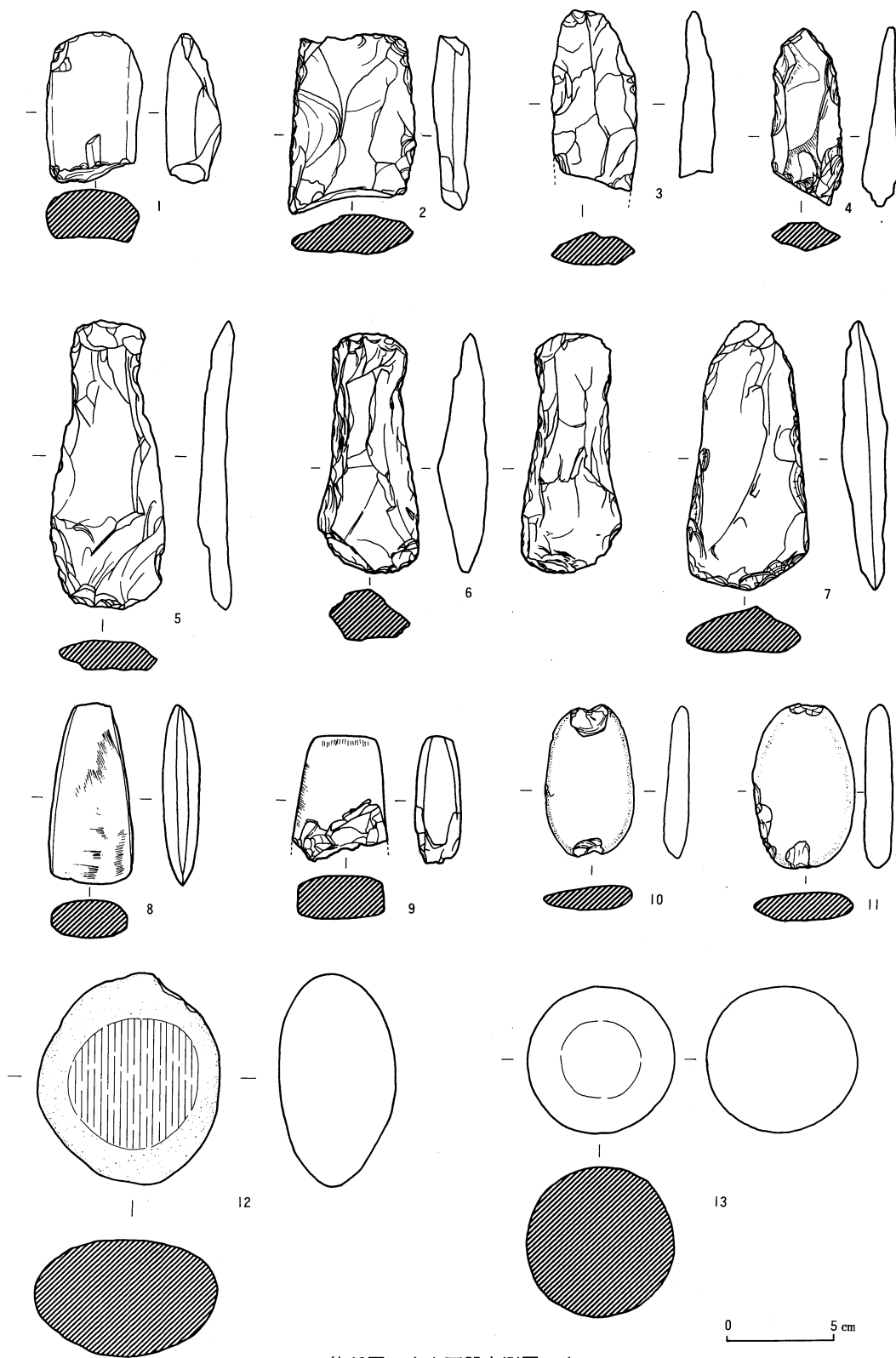
1、4は紡垂車で共に円板状を呈し、Y 2号住居址出土である。1は全体の3割程度が残り他は欠損している。推定の径は5.5cmになり、4とほぼ同じ大きさになる。表裏共に無文で、胎土に金雲母を含み、焼成は良好である。4も同形の円板状紡垂車で文様は孔を中心に五分分するように二本の平行沈線で区切られている。中央の孔は6mmを測り、直孔である。

2は環状で中心孔を有した耳飾りである。両面共に孔にむけて凹んでおり無文である。黄褐色を呈し胎土には金雲母を多く含んでいる。外径4.6cmの中形品である。

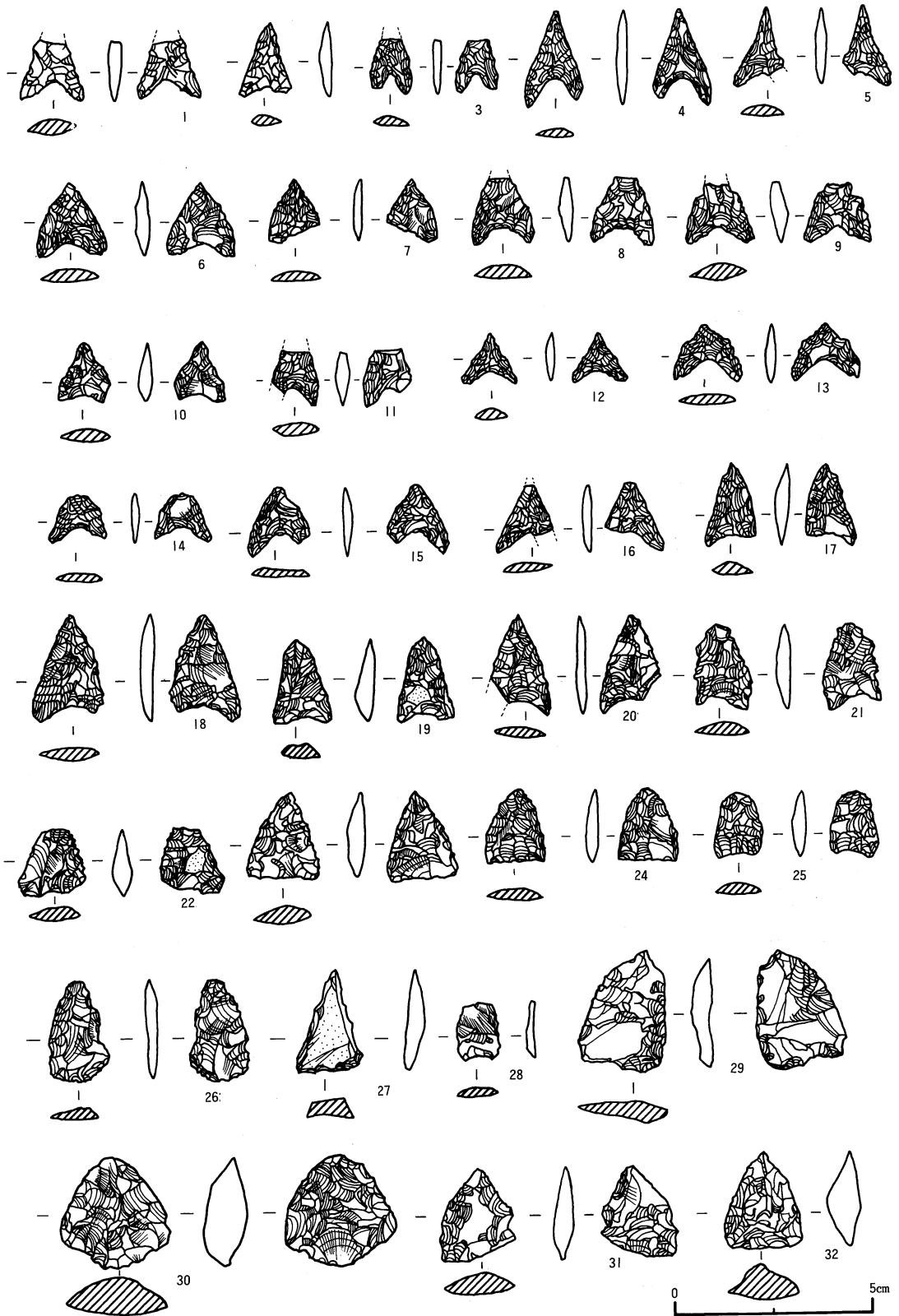
3はミニチュア土器で、口縁の径4.8cmを測り、無文である。胎土中には少量の金雲母を含み、焼成は普通である。土坑3からの出土である。

5は土器片を利用して作った土製円板である。径3.4cmの小形で、表には隆帯の一部と、平行沈線文が施されている。器厚は1.1cmを測り、焼成中位である。

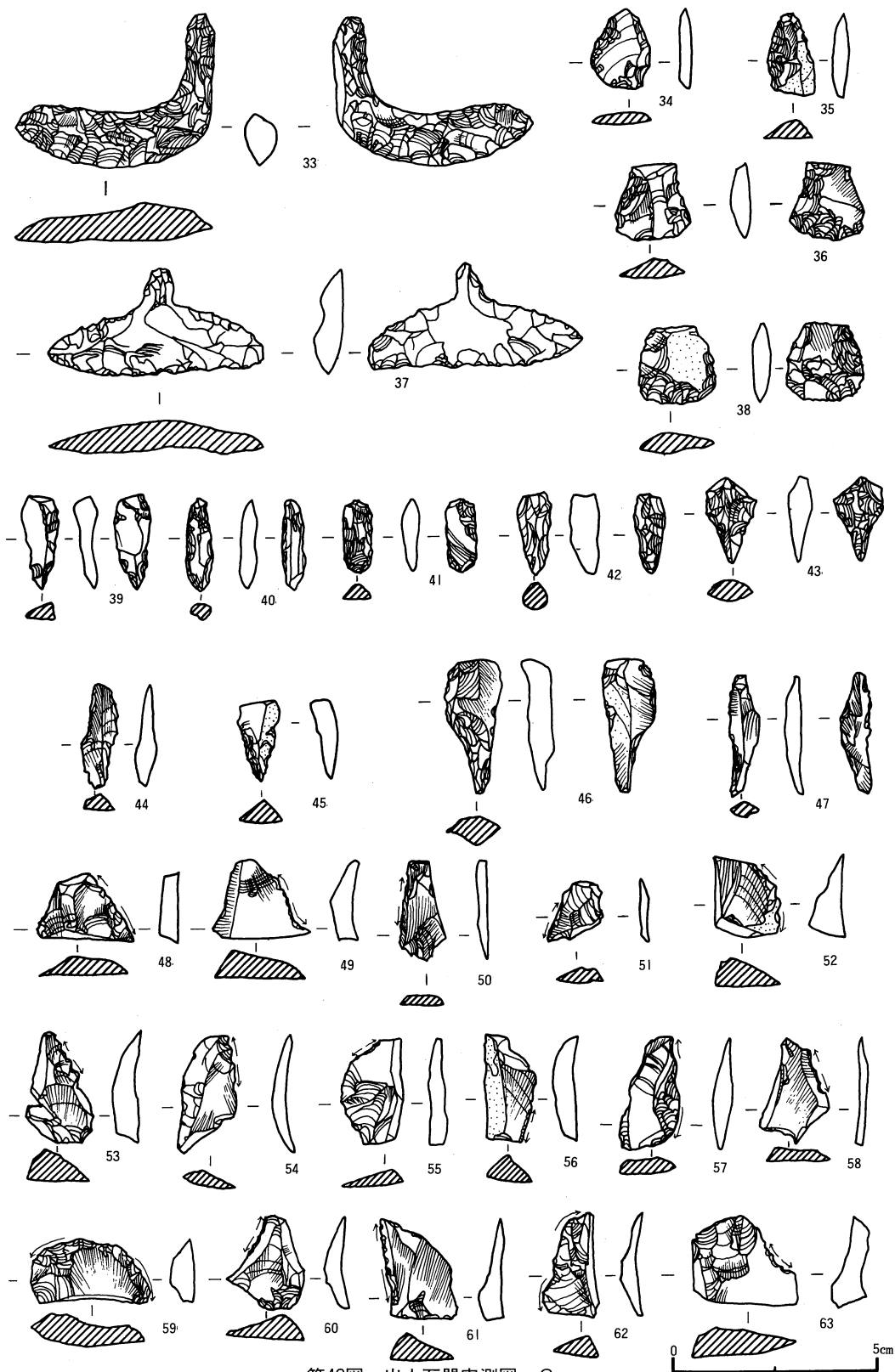
6はJ 4号住居址覆土中より出土した獣面把手である。首部上はほぼ完形で、鹿あるいは犬と考えられる。三角形に作られた顔は先端に口を表わし、両側に目と耳をはっきり形作り、頭部から首部にかけ、半割竹管による施文がほぼ全面に施されている。喉部から両側面の首部にはソーメン状の細い隆帯を付け、その上を竹管状の工具で押し引きをしている。当時の人々と獣とのかかわりを知る上で貴重な出土遺物である。



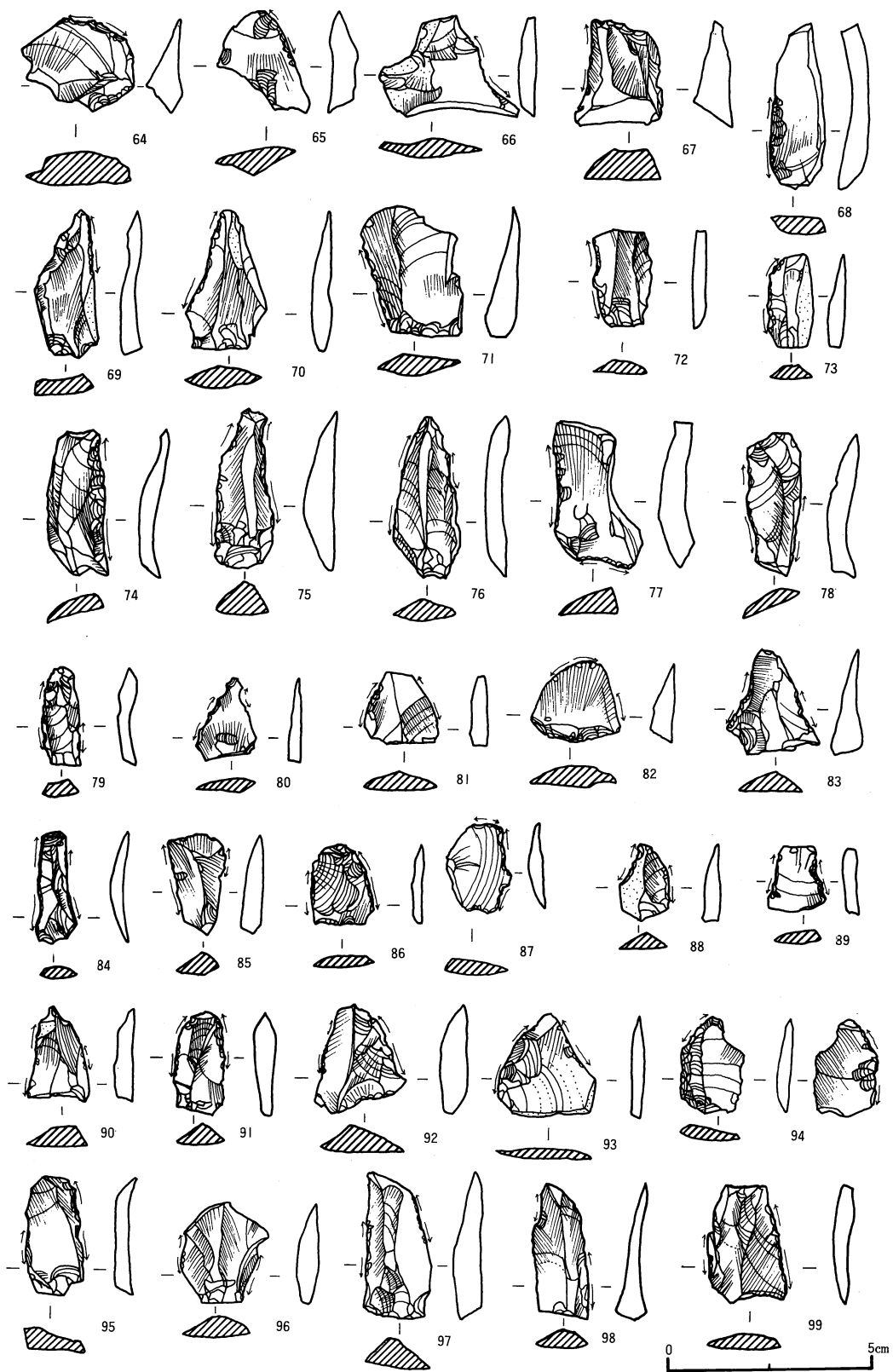
第40图 出土石器实测图一1



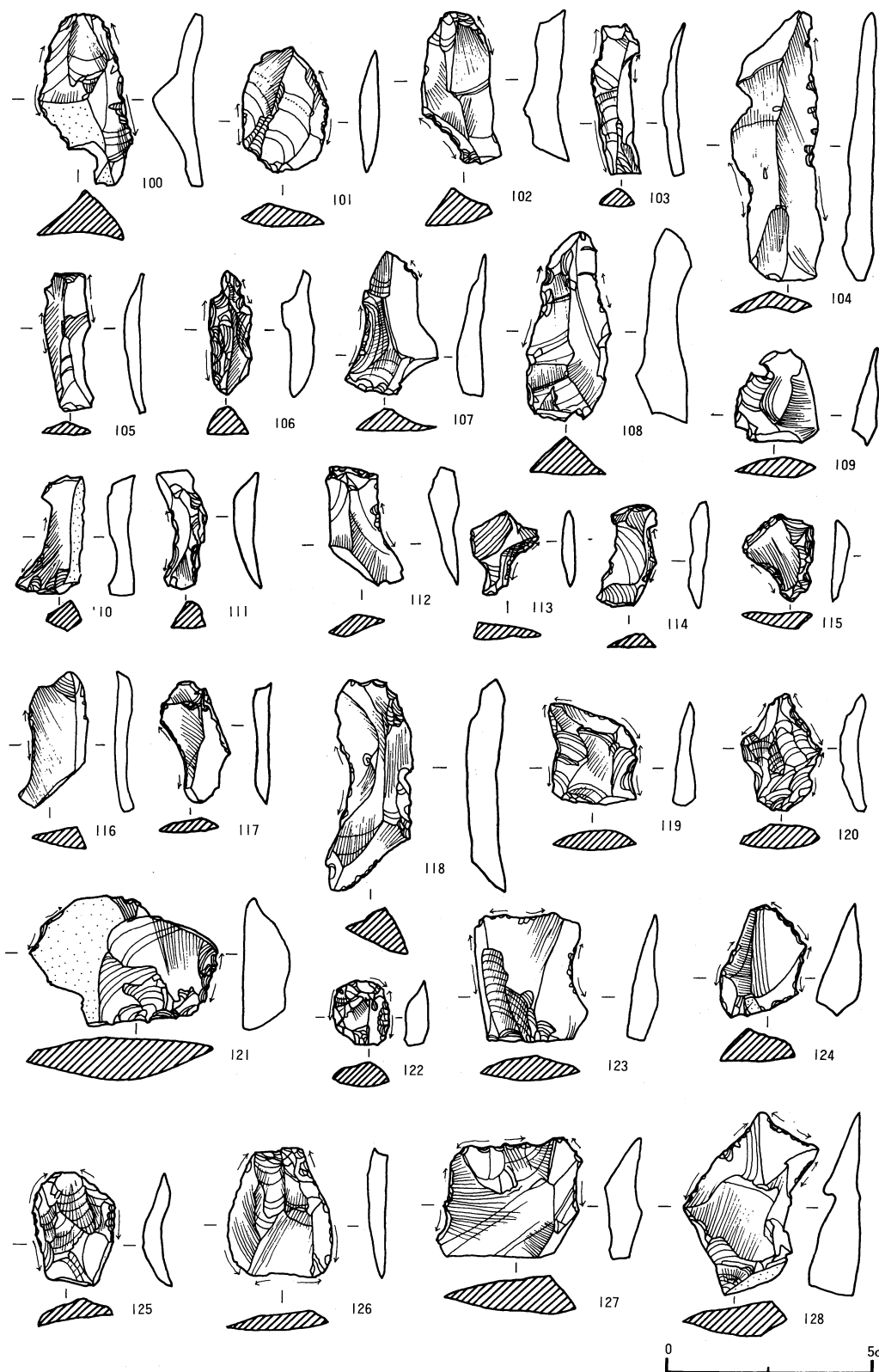
第41图 出土石器实测图—2



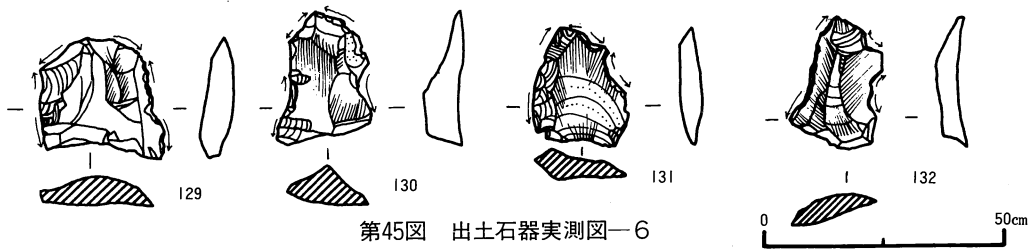
第42图 出土石器实测图—3



第43图 出土石器实测图—4



第44图 出土石器实测图—5



第45図 出土石器実測図—6

6 石器

本遺跡で石器の出土総数は144点である。大型定形石器13点、小型定形石器46点、小型不定形石器86点である。その内訳は出土石器要目一覧表に示して一覧できるようにしてある。これを類別して簡単な説明を加えてみた。

1) 大型定形石器 (打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石)

第1類 (第40図2～7)

形態的には小型の石斧で6点のうち半数の3点が欠損したものである。形は短冊型、撥型のもので、石器の表面に礫面を残すものが2点あり、他は母石の芯を利用している。主要作業部位は先端にあるため細かな調整が行なわれている。5は先端に使用による磨耗痕が見られる。2、3は砂岩、4は輝緑凝灰岩、5は緑色凝灰岩、6は硬砂岩、7は領家変成岩である。

第2類 磨製石斧 (第40図1、8、9)

1は頭部と先端部を欠き胴部のみ残ったもので、石質は緑泥片岩である。8は小型の定角式石斧で、全面を美しく磨き、特に側面も丹念に磨かれて正面背面との間に美しい稜線が作り出されており蛤刃の刃部が整えられている。9は8よりやや大き目の磨製石斧であるが、胴下部が欠損している。石質はチャートである。

第3類 石錘 (第40図10、11)

2点出土しており、いずれも楕円形扁平な自然石を用い、上部と下部を打ち欠いて袂りをつけている。石錘としては並の大きさであり、第II次調査においても同形のもので出土している。10は粘板岩、11は硬砂岩である。

第4類 磨石 (第40図12、13)

2点出土している。12は全面が磨かれている。なかでもやや平らな面が強く擦られて磨滅しており、長期間の使用を物語っている。13はJ 6号住居址の炉址から出土したもので、野球のボール状の球形を呈している。全面が磨かれている。

2) 小型定形石器 (石鏃、石匙、石錐)

第1類 (第41図1～16)

石鏃のうち脚が長く、えぐりがかなり深いものをこの類とした。2点はチャートであるが残り1は黒曜石製である。完形品は30%程で残りは、先端部あるいは脚部が欠損している。大きさ

にはバラツキがあるが、いずれも丁寧な剥離を施しており鋭い先端部や両縁辺を形成している。えぐりの状況も逆V字形を呈すものと、ゆるやかな逆U字形を呈すものがある。又両縁辺の状況も直線に近いものと、内外にゆるく湾曲するものの三種類になる。すべて無柄鎌である。

第2類 (第41図17～21)

脚が第1類よりも短く、えぐりが比較的浅いものをこの類とした。5点共に黒曜石製である。長さが2cm以上で全体的に大き目の部類に入る。両縁辺は直線もしくは外側にやや湾曲した状況を呈している。無柄鎌である。

第3類 (第41図22～32、第42図34～36、38)

無柄で、三角形の底辺にあたる部分がほぼ直線か、あるいは逆に下に出ているものをこの類とした。29、32がチャートであり、他はすべて黒曜石である。29～31、36、38は他に比べてやや大きく全体的に丸味の強い石鎌である。特に30は重さが平均重量の5倍もあり大型の石鎌である。

第4類 石匙 (第42図33、37)

33はI-3グリッドからの出土で石匙としてはめずらしい形を呈している。器面をほぼ全面にわたって調整剥離して形を整えている。柄の部分と刃部がほぼ直角となり、刃部は両側から剥離され蛤刃状になっている。柄にあたるつまみ部にえぐりを入れてあるものが多いが本例にはえぐりは見られない。黒曜石製である。37はY2号住居址覆土中からの出土でチャート製である。この器形はいわゆる横型の石匙といわれるもので一般的によく見られる。剥片を三角形に近い形に整え、その頂点に突起がつけられている。このつまみは着柄の際に用いられたものとする。つまみに対する底辺に鋭い刃がつけられている。

第5類 石錐 (第42図39～47)

9点出土しているがすべて黒曜石製である。先端部の形状は断面三角形のものが最も多い。半数は先端部が折れ欠損している。なかには先端部が磨滅して丸くなっているものがある。それぞれ使用の目的により先端部の太さ、長さなど違っている。

3) 小型不定形石器

ほとんどが黒曜石細片に刃部を施し、スクレイパーとして用いられたものである。刃部を施した部分やその数によって4類に分けた。

第1類 (第42図48～63、第43図64～74)

スクレイパーのなかで最も数量の多いもので、縦長の剥片の一侧縁に刃部を施したものである。大きなものは6cm余の長さを有するものがあるが平均3～4cmの縦長剥片を利用しているものが多い。刃部は細かな調整を施しかなり鋭い刃部を形成している。

第2類 (第43図74～99、第44図100～109)

両縁辺に調整を施し刃部を形成しているものをこの類とした。形状は第1類と同じく、縦長

の剥片を利用し、両サイド又は片側と上部というように2ヶ所に刃部を施している。

第3類 (第44図110~118)

片側縁の調整部が内湾しているものだけを別にした。作業目的によってそれぞれ湾曲の度合を調整したものと考え、ノッチドスクレイパーのような調整ではない。

第4類 (第44図119~128、第45図129~132)

調整した刃部が三辺あるいは全縁に施したものを別にして一類とした。この類の形は四角形や丸味を呈したものが多く、作業部位が全周縁で、作業の種類によって使用する部分を変えたのであろう。「ラウンドスクレイパー」と呼ばれる一種である。

第1表 出土石器一覧表

挿図番号	種別	石質	最大長 (cm)	最大巾	最大厚	重量(g)	出土状態	備考
40-1	磨石斧	緑泥片岩	7.0	3.8	2.2	129.0	J 6号住	
40-2	打石斧	砂岩	8.1	5.7	1.8	121.0	Y 2号住	
40-3	打石斧	砂岩	7.8	3.9	1.4	70.0	H 7号住	
40-4	打石斧	輝緑 凝灰岩	8.4	3.2	1.2	54.0	H-13	
40-5	打石斧	緑色 凝灰岩	13.5	4.6	1.3	121.0	I-10	
40-6	打石斧	硬砂岩	11.2	3.7	2.3	122.0	E-12	
40-7	打石斧	領家 変成岩	12.5	4.8	1.8	160.0	I-8	ホルンヘルス片磨岩 → 領家変成岩
40-8	磨石斧	チャート	8.4	3.5	1.8	93.0	Y 2号住	
40-9	磨石斧	チャート	5.9	4.0	2.0	90.0	J-12	
40-10	有溝石錘	粘板岩	7.1	4.2	1.1	50.0	I-5	
40-11	有溝石錘	硬砂岩	7.6	4.6	1.3	89.0	E-12	
40-12	磨石	石英 はん岩	9.9	8.5	5.4	631.0	K	
40-13	磨石		6.8	6.9	7.0	422.0	J 6号住覆土	

第2表 出土土器一覧表

挿図番号	種別	石質	最大長 (cm)	最大巾	最大厚	重量(g)	出土状態	備考
41-1	石鏃	チャート	1.5	1.2	0.4	0.6	F-12	グリッド
41-2	"	チャート	1.9	0.8	0.3	0.5	I-9	グリッド
41-3	"	黒曜石	1.3	0.9	0.2	0.3	B-39	グリッド
41-4	"	黒曜石	2.4	1.0	0.2	0.5	H-9	グリッド
41-5	"	黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.4	土壇No.2	
41-6	"	黒曜石	1.9	1.4	0.3	0.8	I-3	グリッド
41-7	"	黒曜石	1.6	1.3	0.3	0.3	土壇No.2	
41-8	"	黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.7	D-13	グリッド
41-9	"	黒曜石	1.5	1.4	0.4	0.7	J-8	グリッド
41-10	"	黒曜石	1.5	1.2	0.3	0.4	J-6	グリッド
41-11	"	黒曜石	1.3	1.2	0.3	0.5	L-9	グリッド
41-12	"	黒曜石	1.2	0.8	0.3	0.2	F-10	グリッド
41-13	"	黒曜石	1.5	1.4	0.3	0.4	J-9	グリッド
41-14	"	黒曜石	1.3	1.2	0.2	0.3	I-14	グリッド
41-15	"	黒曜石	1.7	1.5	0.2	0.5	D-11	グリッド
41-16	"	黒曜石	1.7	1.3	0.2	0.3	I-4	グリッド
41-17	"	黒曜石	2.0	1.1	0.3	0.6	J-15	グリッド
41-18	"	黒曜石	2.7	1.5	0.3	1.3	E-3	グリッド
41-19	"	黒曜石	2.1	1.0	0.3	0.9	I-4	グリッド
41-20	"	黒曜石	2.5	1.3	0.3	0.6	G-4	グリッド
41-21	"	黒曜石	2.1	1.4	0.3	0.7	土壇No.2	
41-22	"	黒曜石	1.7	1.3	0.3	0.9	H-12	グリッド
41-23	"	黒曜石	2.1	1.5	0.5	1.2	D-11	グリッド
41-24	"	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.7	I-3	グリッド
41-25	"	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.5	J-10	グリッド
41-26	"	黒曜石	2.5	1.2	0.3	0.9	C-12	グリッド
41-27	"	黒曜石	2.5	1.2	0.4	1.5	J-1	グリッド
41-28	"	黒曜石	1.4	1.0	0.2	0.3	J 6号住	

挿図番号	種別	石質	最大長 (cm)	最大巾	最大厚	重量(g)	出土状態	備考
41-20	石鏃	チャート	2.7	2.0	0.4	3.0	J-12	グリッド
41-31	石鏃	黒曜石	2.7	2.6	1.0	6.3	表採	
41-32	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.5	2.0	C-13	グリッド
41-33	石鏃	チャート	2.4	1.9	0.9	3.0	Y2号住	
41-34	石匙	黒曜石	3.8	4.7	0.8	7.3	I-3	グリッド
41-35	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.3	0.7	J-4	グリッド
41-36	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.4	1.0	I-14	グリッド
41-37	石鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.5	1.0	U-8	グリッド
41-38	石匙	チャート	2.6	5.3	0.6	5.8	Y2号住	
41-38	石鏃	黒曜石	1.8	1.8	0.4	1.1	Y2号住	

第Ⅳ章 ま と め

伊那谷の地形は、中央を南下する天竜川、天竜川の両岸に広がる広大な河岸段丘、これらの河岸段丘を大小の河川が侵蝕して形成した田切地形、そして背後にそびえる西の中央アルプス東の南アルプス、伊那山地によって象徴される。古代以来、伊那谷の人々の生活は、この地形の制約を強く受けてきた。

天竜川両岸の遺跡の立地をみると、

1. 天竜川両岸の河岸段丘端の湧水地帯に近い地域。
2. 中央アルプス、伊那山地の山麓の扇状地。
3. 河岸段丘を侵蝕して流下する中小河川の両岸地域。
4. 天竜川氾濫原の自然提防。

の四つに大別される。

時代・時期によって遺跡の立地は複雑に変遷しているが、各時代にわたって、また、多くの遺跡が集中して位置しているのは、1の河岸段丘端の湧水地帯に近い地域である。

箕輪町内においても、上の林遺跡をはじめ本城、北城、南城、猿楽(以上竜西)、大原(竜東)などの規模の大きい遺跡や、上伊那地方唯一の前方後円墳である松島王墓古墳(長野県史跡)も河岸段丘端に位置している。

上の林遺跡は、箕輪工業高校敷地を中心に、およそ30,000㎡におよぶ遺跡と想定される。箕輪工業高校校舎改築事業にともない、第Ⅰ次(昭和55年)、第Ⅱ次(昭和56年)、第Ⅲ次(昭和57年)の3次にわたる発掘調査が行なわれた。この間の調査で、縄文時代中期、弥生時代後期を中心に、縄文時代前期・中期・後期・晩期、弥生時代中期・後期、平安時代と長い時期にわたる遺構、遺物が検出されている。遺構では、住居址23軒(縄文前期2、中期中葉3、中期後葉8、弥生後期8、平安3)、土壇24基、掘立建物址3軒などがある。調査は、校舎改築にともなうもので、限られた地区のみの調査であり、上の林遺跡の全容は明らかにすることはできなかったが、各時期の集落のあり方、住居址の形態の変遷、出土遺物の様相の一端を知ることができた。

限られた期間の中で、しかも、箕輪遺跡、天王塚古墳と併行しての発掘調査と報告書の作成といったきびしい状況のなかで、発掘調査、遺物の実測、図版作成、原稿執筆、と精力的に行なってくださった調査員各氏の労が大であったこと、箕輪町、箕輪町教育委員会、箕輪工業高校、特に箕輪町郷土博物館のみなさま方が、調査に全面的に御協力くださったことをここに記し、厚くお礼申し上げます。

この報告書が調査や遺跡保護に生かされることを期待しています。

(丸山敏一郎)

版 図



上の林遺跡第Ⅲ次調査区近景



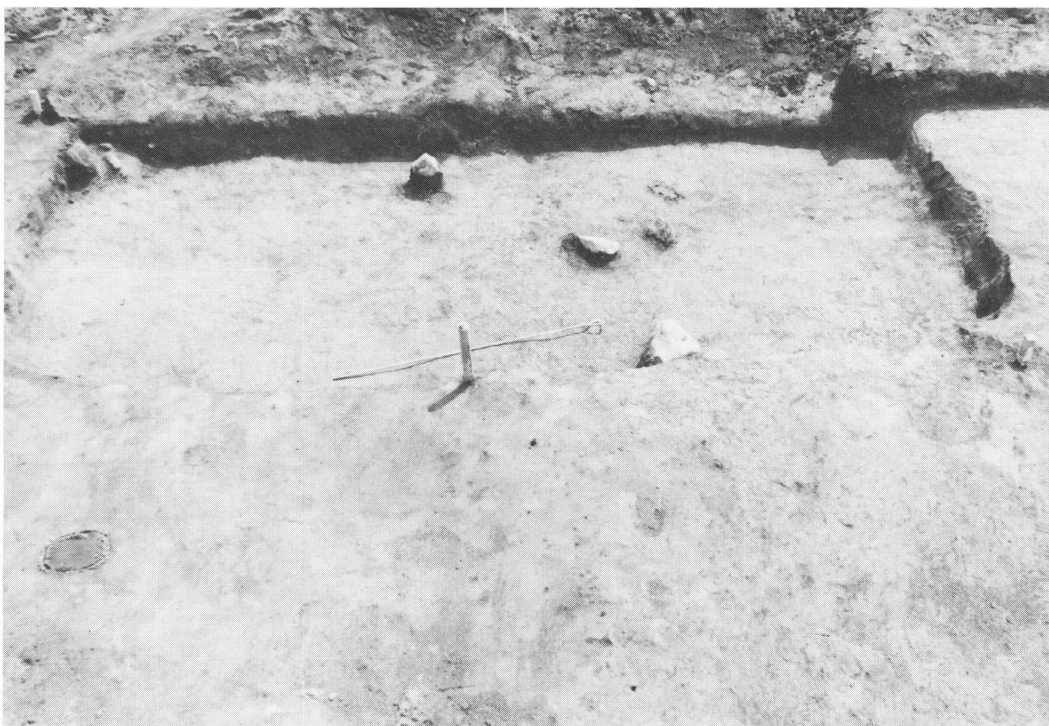
遺構全景



J-1号住居址



Y—2号住居址



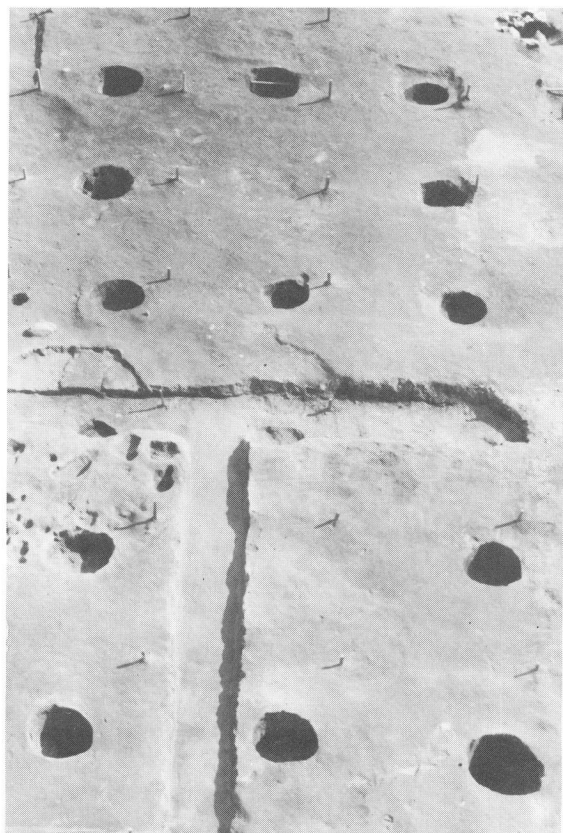
Y—3号住居址



J—4号住居址



J—6号住居址



掘立建造物址



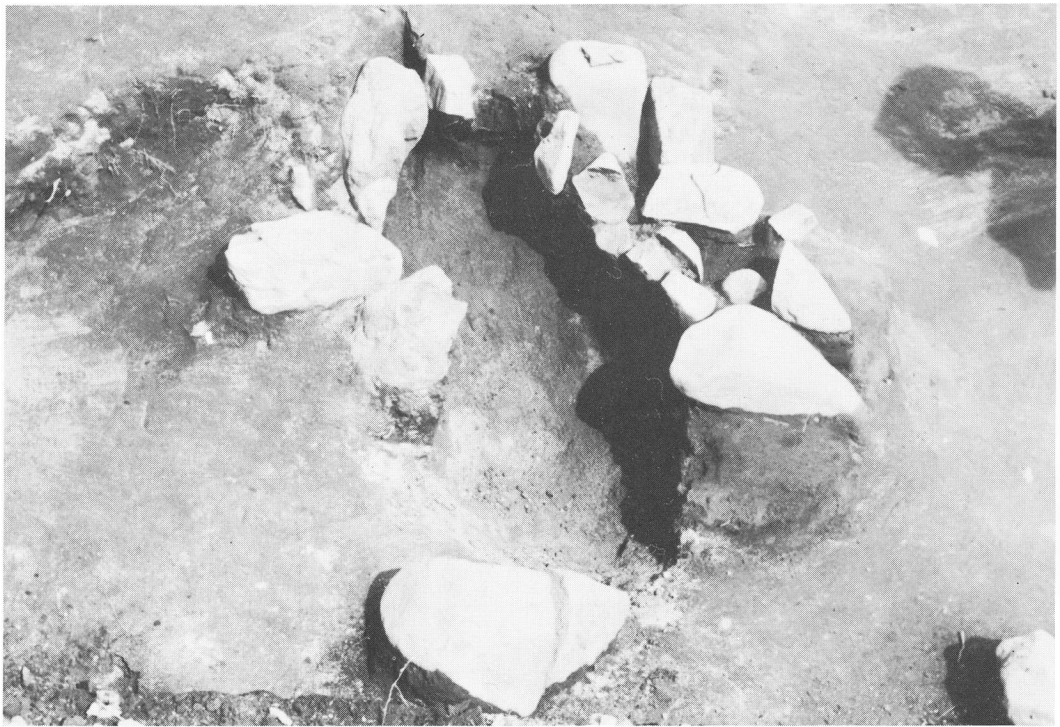
D-1号土坑



D—2号土坑



D—4号土坑



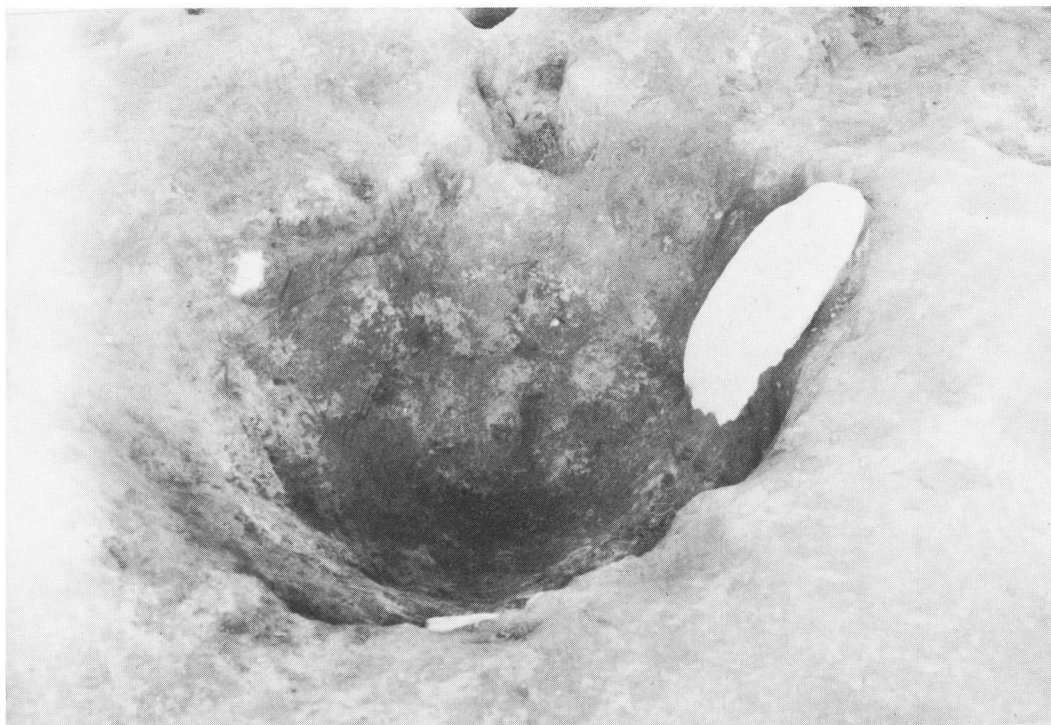
H-5号址カマド



H-6号址カマド



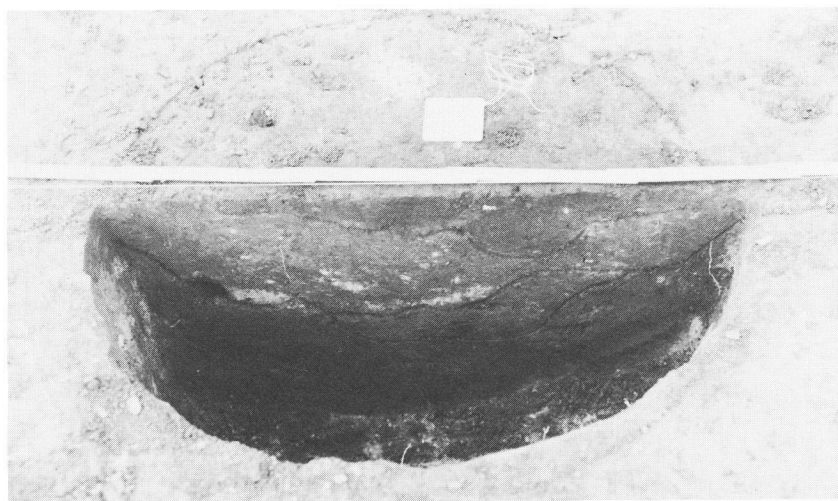
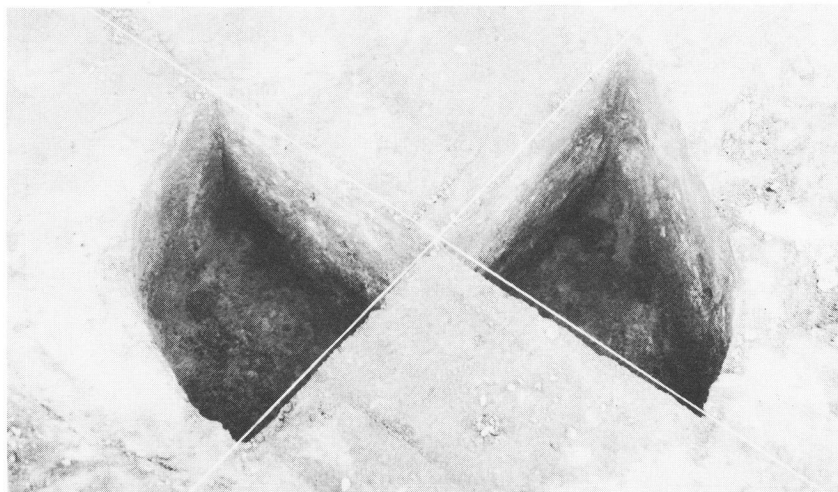
石組み炉址



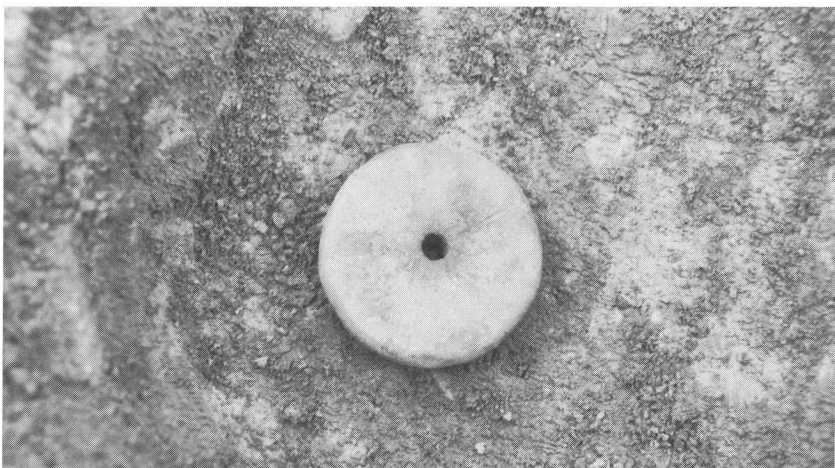
J-1号址炉



土坑土層狀況



土層状況



遺物出土状況



遺物出土状況



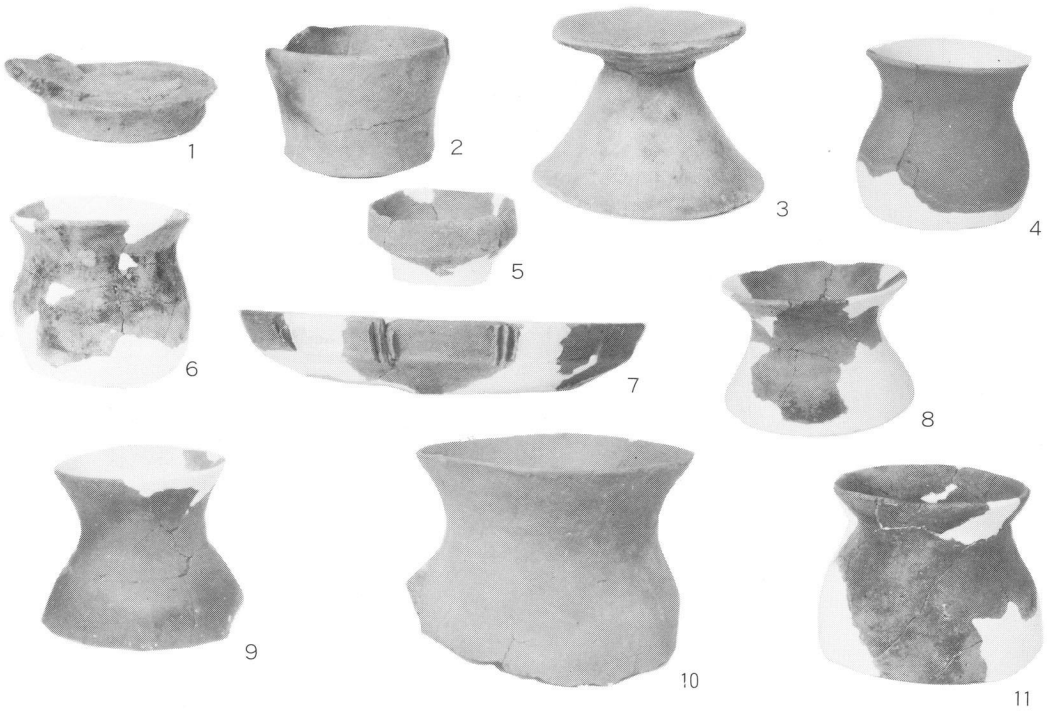
調査スナッフ



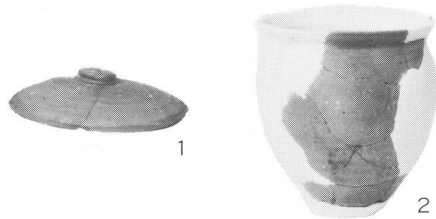
視察風景



J 1号住居址出土土器 (1— $\frac{1}{3}$, 2·3— $\frac{1}{6}$)



Y 2号住居址出土土器 (1·2·3— $\frac{1}{3}$, 4~11— $\frac{1}{6}$)



H 7号住居址出土土器 ($\frac{1}{6}$)



グリッド出土土器 (1~6) 石組炉 (7) (1・2・3— $\frac{1}{3}$, 4~7— $\frac{1}{6}$)



土製品 ($\frac{1}{2}$)



J 1 号住居址出土土器片